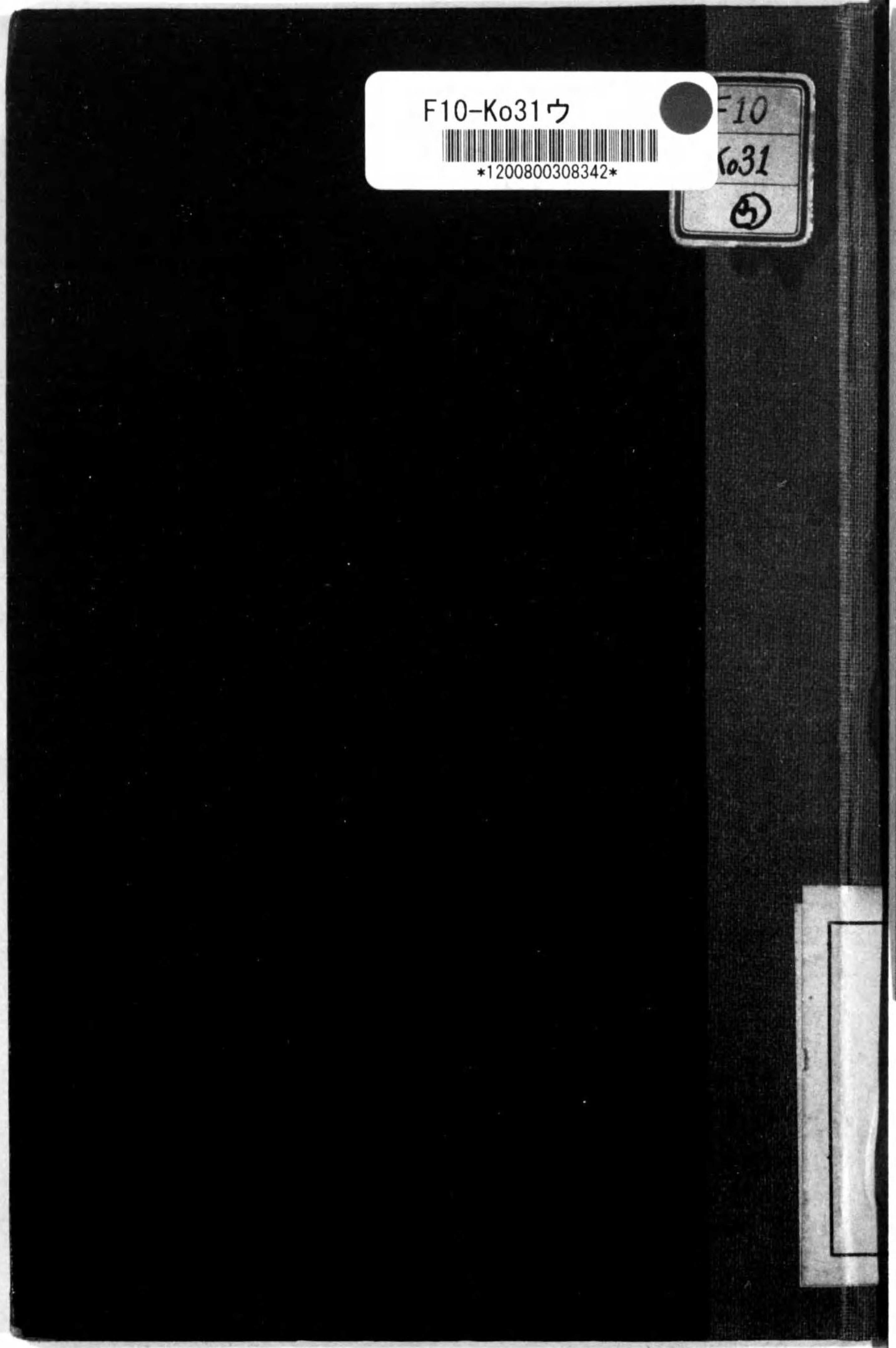


始

25. 9. 14

新小説

花扇　淡路嶋　埋火

合巻

春陽堂蔵版

№2596
東京図書館蔵
F10
S031
K031

花扇第一圖

花扇　即真居士

花扇とは何の名、なまめいて然も火の徹らぬ文字ながら櫻の繪摸樣押した扇を折て糊口の助けとなせば花扇、落葉庵とは何人の住む家、言葉の續きいと六かしけれど杜頭の嵐の吹付るに任せ露霜の朽ずに隨ひて垣根のあたり常に埋めども掃ふと稱すれば落葉庵、いろ〳〵の名も煩はしけれど是とて皆な世間の人が勝手に見て勝手に呼ぶに任せたる綽名にて世に聾の虫どころ冬枯れ近き嵯峨とは言はずツイ町近き洛東清水坂の片邊りにほんの名のみの住居を構へ破籬につゞく差掛の板庇折もあらうに時雨降る小春空色摸樣見るさへもすさまじき扇子日向にならべて末廣一ツめせ世は冬かとも知らぬ顔にとぼけたる生計をなす其女の實の名はと問へばお蝶年はと聞けばアイとむかり去かと答へもおか〳〵に先づ翻る、は果敢なき露袖口の色あせたるも越して來た昔しいく春の花に馴れたる名殘なり

こゝろみに其素性をたゞすにお蝶は元伏見の生れ初め何人の子といふとを知らず二ツの年に同處墨染寺の門前に捨られて闇櫻散る春の短夜肌寒きあけ方の風

第一圖

に誘はれ母に添寢の夢破れていぢらしなふも聲立てうち啼なたるを同じ町の土人形師大樂七兵衞といふものに拾ひ上げられて人知れぬ養女清貧の身の活計に乳母日傘の長柄に手は届かざれども身じんまくして入れて置く揺籃の中飢ゆれば啼き飽けば眠る無我無心の可愛さは乳の粉すつて含める片手間の市間人形いぢりなれた手汐に掛けて育む程にいつそ衣せる物にはひ過ぎて驚風の病をやどさせ添乳分に餘りて醋酸醗酵とやらの惱みなど起させる類ひは立優り人暇なくして抛つて置けば夫相應にまた自然といふもの、手が安排して殺しもやらぬ寢顔に笑ひ起顔に物を見知りて聽てやう〳〵這出る虫氣もなく育ち行きぬ年七歳にして文字を正し十一にして歌よむ非倫にはあらねどおひ〳〵生長するに隨つて先づ愛々しき顔容板棚に並べある一文人形とその類を異にすれば嬉しや此の子何人の胤なるにや竹の股から生れし桃の核より生ひたる二葉とも思はれねど何れ是れ根掘り葉掘らば深き譯ある人間の仕業には極まつたるが抑も李の枝の下に納豆烏帽子直した若衆の落し物か瓜畑に駒下駄踏込んだお女中の忘れ片身か何にしても好き蔓に實つた代物ならそれにはなし難しおのれ年既に

四十の坂を越して妻といふもの持つたとなければ子を授かるべき筈は無し是れぞ誠に幸ひなる天の賜物年取つての樂しみは何のその高峯の花に譬へられた手作りの泥塑とさし向ひにて笑ふともなくて居るに打優ると萬々なり好き善根してけりと世を茶に濟す後生樂一三昧の大樂七兵衞深く秘して人には言はず愛育いよ〳〵疎そかならざりしかば親一人子一人の安氣な生活貧は貧ながら樂み亦その中にあつて瓢箪の水うき世の味の辛らきを知らずお蝶はやがて手習を門前町の某がし御坊に授かり遊藝を撞木町のれ墨と云へるに習ふて持て生れたる性質のやさしきに年にはませて物心のさとりも早く何時しか彈きれぬえた女の道のかんどころ糸櫻の花羞と含む十五の春ともなりたるが或日の事なりお蝶は父が晩餐の番菜の間に合ふ樣能く洗ふて置けと言付けて他出した跡その芹川根芹洗はんとて井戸端に立出つゝ清水そゝぎ掛けて居たところへはら〳〵と落ちて來た春の俄雨ふりかゝるは花か霰か襟元つめたく墻越しの櫻振かへる片頬に吹雪を亂して風さへ颯と落し來たればアレ人形がと洗ひさした根芹そのまゝ其處に抛つて置き實の子の此方に干してあつた土人形の下地取込んと先づ慌しく

庭口に駈入りけるに折しも外面に人音あつて續いて我家に駈込んだ一個の男こ
れハ今しも井戸端に水掬んで居た同じ町の破落戸に善太といふものが父の留守
に折惡しと思へば此ハいかに其人にハあらで見かへる目にも先づまばゆきハ裡
金の陣笠古錦襴の裡付きたる野羽織にさへ早う只人ならぬと思ハれたり
お蝶ハ胸ときめきと取込みかけた土人形其處へおしやつて是ハそも何處の誰樣
何の御用があつて我家へハお越し父樣ハ今生憎他行して留守なると言ふばえ
に未だ綻ろばしてハ言出しかね續ぎはぎの針目わびしき膝頭なでさすりての當
惑顔を流し目に見遣りつゝも茶一ツ參れと其人ハ大やうな言葉つきア、こりや
分つた此頃の彌生空墨染の櫻見物がてらに矢張京邊から遠足とやらにござつた
お武家さま俄雨に降出されて遁端失ふてからの雨やどりといふものぢや折もあ
らうに生憎と父さんが留守の間こりや何として好からうとませても有繫娘氣の
とつおいつ漸々に汲んで出す井手の山吹色みの一ツだに無き我家にハあらねど
も花咲く宿の貧乏ハ錦の裏に畠木綿田舍びた我身の態を見くらべらるゝが耻か
しくて只もじもじと俯きがちに差出すその筒茶碗手に取りつゝも侍士ハ只一息

に呑干せしがきつい渴きか今一服との二度目の所望
お羞かしやそれ澁茶一服いと〳〵お易い御用ではありながら釜の湯がすがりに
なつて夫さへも今ハ心に任せぬ折の惡さこりや何として濟したものと案ずれど
明らさまにハ言出しかねた心の當惑お蝶ハ顏を赤めて次の室に退きたるが人知
れぬ耻をかきさてた地爐の火に柴さしくべて吹付る頰のみあつきも娘心の一む
いなるべし大佛の鑵子尻遲くして黑木のみ燻ぶれば未だか〳〵と後ろが見られ
心許りは焦てども兎や角と時刻移りがちにて雨もやう〳〵小休をなしたり手間
取つて心なきものとや笑れる、情なしとや卑まる、ちつとも早くとやう〳〵に
入かへた茶に花香面伏せながらに椽端に持運んで勸むれば辱じけなしと侍士ハ
殊の外なる喜悦の氣色手に取上げて下にもおかず賞玩さるゝさへ羞かしくて見
かへつた門口人音あるをよき汐に再び次の室に起んとすれば折しもドヤ〳〵と
又もや庭口より見慣れぬ多くの侍士扈從の人かと覺しくて破籬の此方に小腰を
屈めお行方何れにと案じましたに此におこして御座りましたか雨も小休をなし
たれば日暮れぬ中にちつとも早く御歸城あらせられます樣にと禮儀正しき言語

擧動ぞらりと居並んだ其人ハ鷹すゑさるもあり犬牽いたるもあり其打扮のはれがましさこりや間違つた夫でハなうつたかと呆氣ニ取られて立端失ふさお蝶の顔流し目ニ見やりつゝも簀の子を起上りし件の貴客ハ思ひも寄らざる驟雨のゝ此處を借受けて此れなる娘に大儀を懸けたり心付して取らせよとて塵打拂ふてぞ立出ける

●第二

お蝶とんでも無いよいとが湧いて来ましたお蝶此方あれを何ぢやと思ふてざ一昨日のお侍士を、なに分らぬ分るまいな勿体ないと彼れハな彼れハ浮田樣の殿樣ぢやこれさお蝶ちよつと言て聞かすとがあるされさ何をして居る繪の具を、何の其樣なとハ抛つて置々お蝶其方ハいつぞやも呉々言ふて聞かして置いさ通り今度いよ〳〵御奉公ニ上らねばならぬとニなりましたぞやと唐突ニ父七兵衛が門口から入つゝ来さま、例ニないそれ〳〵とした物の言樣お蝶ハ聞さして驚き顔ニ擦つて居た胡粉此方にかたよせつゝ「と、さん何と仰しやります「何でない御奉公ニ上らねばならぬと云ふことぢや今言ふた浮田乃殿樣あれが吉春公と

て名高いお方一昨日俄雨に降籠められて此へ御座らしやつた時留守して居た其方を見そなハせて下々ニ珍らしい悧發な娘お妹樣何姫樣とやら乃お相手ニよい年むえゆゑ親元へ申含めて小性に上げさせよと乃難有い御意それ付て御家中の大石樣といふお方のお使が今本陣まで見えてわしが呼ばれて行つたのぢやがイヤもう御懇ろな仰しやり樣願ふてもない旨い話ぢや日頃も幾度ぅ言ふて聞かせた通り分ニない俄出世して吹けば飛ぶ不義の富貴とやら椋子の泡沫見る樣な輕はぞんだ身になつて呉よでハ無けれども親として子の出世願ハぬものハ一人もない其方ハ今年齡さへもやう〳〵十五の稽古盛り行く末の望願ニ人並の人間とならうと思ふにハ上つ方の行儀作法といふもの、一通りも成らうとなら嗜なませて置きたいものどつちみち好い傳手があつたなら何處へなりとも見習奉公ニさし上げて良い衆の風儀見習ハせて置允たいと思ふて居た矢先丁度幸ひの事あれば直と御挨拶申して来た好いか得心が行つたか嬉しか難有いか何ぢや其方ハ何が悲しうて其樣な惡い顔する

お蝶ハ頭うなだれてふさ〳〵と下つる前髪のしゞジツと動ぎもやらず深き思ひ

に閉ぢられて濟まぬ顔付なるに七兵衛は尚も言葉を續ぎ「お蝶其方は何故其様な顔して居るのぢや御奉公に出ることが急に厭になつたのかそちも疾うから得心して居たことではないか其方は何事も知るまいが上さま方の御奉公などといふものは夫は〳〵手の掛つたもの貧乏神と走りごツこして居る我身風情で出られる筋のものではない夫を彼様に御親切に言ふて下さるのは日頃から懇ろにお世話になつて居る皆な彼の本陣の旦那様やお内儀の御恩といふもの永年のお出入先大切なお屋敷なれば御家中の大石様といふへ御奉公の爲めわしが親元になつて私の手許から上げて進ぜやう衣装萬端さし掛つて入用の品々は取敢へず家の娘ソレ彼のお孃様の衣替で間に合して遣る程に其身をおまゝよこして好いと此様に仰しやつて下さるのぢや此な有難いことが何處の世界にあるものかお二人様の御親切に對しても其様な顔しては行れませぬぞや好いかお蝶然うであろ〳〵是がよう無くて如何なるものかと七兵衛は尚も起つ居つ折しも門口がらりと開て聲高に迎の男「未だ手間が取れ升ると呼掛られ七兵衛はトツパスカ店前に馳出て「オヽ善太どの本陣からのお迎へか直ぢや〳〵待て下され

花扇　第二圖

●第三

此の二三日引續いての忙しなき漸やつと片付けて七兵衛我家ニ歸つたハ其日も既ニ夕ざくらはら〳〵と人の戀しき火點しごろガツカリと地爐の端ニ腰さし伸べて一休みなしたる後ハ何事もひつそりと鼠の跡の田家柴荊來る人もなくて四下のやう〳〵靜まり行くニ又思ひ續けられるはお蝶の事ニて今までハ人に急かれもし又急きもし我身が直々つれ立つて行て直々手渡しして歸つたものなれど其の手渡して歸つた心ハ軈て手渡さぬ瞬へ燃込んで夢かうつゝ、ら未だ何となく其邊ニ手仕事して居る樣に思はれてひよい〳〵と後ろが見られア、彼れはあゝで好かつたのか此も此うで好かつたのか何も急いで忘れたものハ無かつたか彼のお守嚢ハ好いかお蝶、この間買ふて遣つた轉ばずの瓢箪彼れハ如何しやつたれ蝶、能う氣を着けて怪我過ちの無い樣ニ御奉公して呉ねばならぬぞやれ蝶、それ〳〵跡の月稻荷前から買ふて來た彼の黑丸子彼れハ合藥ぢや用心の爲め少しなりと持つて行きやお蝶、人樣に叱られても泣らぞ〳〵苦いもの喰ふた樣な顏見せてハなりませぬぞやお蝶、好いかお蝶、何か未だ忘れたものがある樣なヿ

第二圖

レお蝶〳〵と心の中お蝶は心の中にも返事なけれバ始めて氣が着いて我と我身に還りホイ忘れたは此方の事それ蝶は、

一冬越しに囲ふた鉢入れの福壽草朝夕の出し入れさへも職事せはしき時には拋遣りがちにておそ〳〵から心付き俄かに遣つた養氷夜の間に凍を来させ末葉凋る、まで道樂に育てたものでさへ恨めしげな顔もせず咲く春が来て咲いた花人に褒められれバ何ぼうか心嬉しい位なもの況してや譬への外の寶物二ツといへど當歳にひとしい襁褓の中から乳の粉掴つゝ含ませ抱きかゝへして育てたをのを親心の恩愛のあやしさに生みと養ひとの區別如何バかりの隔たりありや七兵衛は我身から進んで世間の春見せに遣つたとなりしが伴れて往れた嫁れ蝶の事今更に思へバ段々と氣に懸つて目の前ふちら〳〵と舞ふても来さうな夢心彼の様には言ふたもの、先がどう世氣の詰る上つ方、未だ皆式の子供なるに能う落ついて勤まつたものであらうか如何な怪我踈忽でも仕出して呉れはせまいか下げられて戻つて来はせまいかイヤ〳〵彼れは常日ごろおとなしい彼の氣質何の〳〵滅太なとで其様な人様に厭がられる様な事まて呉まる筈はない能う心棒

して居て呉れるであらう褒められて居つて呉まるであらうお傅き申すれ姫様とは何様なヤンチヤなお方與女中衆とは何の様な意地惡な衆、行く時に彼の様に泣て行きやつたが彼方へ上つてから尚悲しうなりはせまいか今頃は泣いて居るであらうか寐入らずに家の事ばかり考へて居るであらうか、イヤ〳〵何の其様なと言ふては居られない夫が見習ひといふものぢや何うせ二三日は好い筈のものでないちつと居なじみさへすれバ子供づれは早いもの案じる程の事はあるまいが併し彼の通りな氣質で彼の弱虫で若し強い氣がねして病累ひでも引出して呉れはせまいかア、此様なとならいつそ上げずに置いたがましであつたの責めては今一年も家に置いてそしてもちつと裁縫の稽古でもさせて氣を樂にア、いつそ氣懸りなと今度は又行つた先思ひやつての心配いく度か寐がへり打つて自問自答に夜も夜すがら安くとは眠られず覺むれバ寒き板庇の月まどろめば夢のお蝶となつて迷ふも短き春の一夜うつら〳〵と思ひ明かせしが其の持越した氣疲れに手細工の人形も日頃の様には捗らず口癖の念佛なが〳〵と引出す欠も伸びた次の日の未剋下り物もう頼むと觸込んで思ひも付かぬ門口に一人の客

「土人形師七兵衛とは此方で御座るかと言ひさして咳拂ひ二ツ三ツ様子ありげにさし覗きぬ

七兵衛は聽氣ざすまゝ、領垂れて搖り居たる首を擡げ流し目に門の方ちよろりと見遣しが下地しかけた人形片手に胡粉の刷毛小鍋にさし入れて「何方様で御座りまするかと夫なりに起ちもせず「イヤちと尋ねたい儀があつて參つたもの七兵衛とは此方でござるかと又もや同じ様な事くりかへしての外面の案内に「ても念の入つた物の問ひ様何處へ通る誰様ぢや七兵衛とは私で御座りまするがシテ何ぞ御用で御座りまするかと立出れば是はしたり立て居た其人は若黨中間右左にたばさんだ帶刀さへも黄金の花ちりばめた象眼ちら／＼と昨日見た様な立派な侍士さし近いて言葉づきさへ鷹揚に「七兵衛どのとは其方のとか拙者は濱田殿の藩中に大石掃部と申すものちと頼みさい儀が御坐つて尋ねて參つた許しやれと扇子片手にふた／＼と袴の塵をゆる間もなく四下拂ふて奥の室に通りける

●第　四

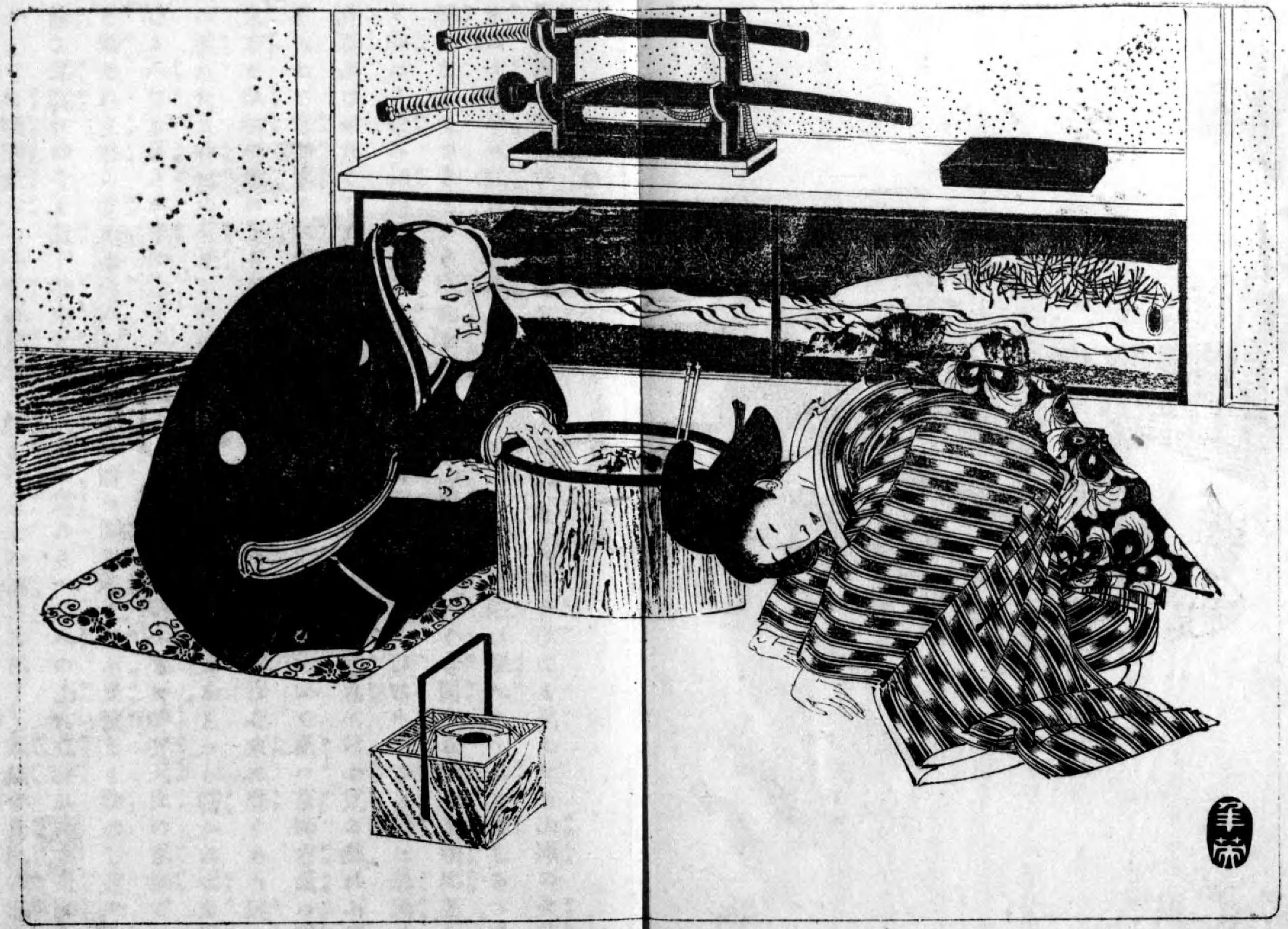
七兵衛は呆氣に取られて遙か末座にうち披く裾ひき繕ひながら慌たゞしげに兩手をつかへ「大石様と仰せやりますれば娘お蝶が今度思ひも寄らぬ御奉公の一條に付まして何かと御厚恩に與かりました旦那様貴方様にいらつしやいますうソレハ／＼マア、左様御座りますれば手前共お初うのお目通り以後何分にもお目懸られ下さりましてお引立の程幾重にもイヤ手前事は斯くの次第申上げまするも誠にお恥かしい次第で御座りますが御覧の通りな老さらばへた親爺め子と致しましては只だ彼女一人でござりますれば責めては後々彼まが出世の手引にもお屋敷様方の御奉公行儀御作法といふものゝ一通り心得させて置きたいが日頃の念願で御座りましたに思ひも寄らず其願ひ遂げまして此様な難有いとは御座りませぬ是と申すも皆な貴方様始め皆々様方の全く御厚情に因りまするけ何れよりお禮を申上げて宜しう御座りませうやらトツトもう無調法な言葉にはなか／＼盡されませぬシテ娘事は如何いふ様子でハイ如何がな無調法なことも致しませぬと滯りなうお目見榮も相濟みましたかハイお恥かしい次第では御座りまするが何を申すにも育ちが育ち別して御覧の通り未だ皆式の子供で御座りますので若しや疎忽なとでも致してお叱りを受けて呉ねばよいがと只夫のみが

案じられ實は七兵衛夜もらく〱とは臥せられん程の次第でイヤもう何や彼と恐入つた次第で御座りますハイ左樣でそれでは彼れも只今では別段悲しい顏も致しませずと能う心棒致して居りまするハイ何も別段無調法も御座りませんでト何やら身勝手な根問ひ葉問ひ我を忘れて先づ子の事に餘念もなきを大石は聞きもあへずアイヤと扇子で話しを絶斷り「コレ七兵衛とやら何と言はるゝぞ我等君侯の御意を承はつて今日わざ〱當伏見まで參つた譯は全くそのお蝶とやら申す其方の娘御奉公の一條に付き直々懇談の致したく夫ゆゑ推參いたした次第なるにその娘お蝶とやらは如何いたしたと申さるゝぞ悲しい顏もせずに勤めて居るかの滯りもなう目見榮が濟んだかのと少しも合點の行かぬ其方の言葉すればそのお蝶は何ぞ仔細あつて最早宅には居らぬと申すのかと問掛られ七兵衛は下げたる首を再び擡げて頓狂顏「へイ何と仰しやります「イヤその御奉公を望むといふ其方の娘何か仔細あつて最早宅には居らぬといふのか如何致したとす申のぢやと扇を杖に威容を崩して差覗かれ七兵衛はいよ〱合點行かず何を言ふのかと夢心地「へイそのお尋ねの娘お蝶が如何して宅に居りませうか然も昨日

の丁度今頃貴方樣の御家來の衆にざ〱當町の本陣小椋屋方までお越しになりましてお上の御意は云々ぢや斯程までも難有い仰せに違背し時日後れては相濟まざれば片時も早く同道せんと夫は〱御懇ろなお心添身に取つて願ふても無い幸福に御座りますれば此方に一言の否やはなく只一向に難有いとに存じまして仰せのまに〱早速ふれ供致させて差出しましたに貴方樣にはまだ御承知遊ばされぬと仰しやるので御座りますか何ぞれ間違ては御坐りませぬかアノ若しや思召し違ては御坐りませぬかと膝摺寄せて問かへせば大石は呆れ顏やう〱に身を起して閉ぢたる眼を睜きたるが手に持つた扇子ハツタと其處に投棄て「さても〱不審な事七兵衛とやらこりや困つたことになりました尋ねて來た大切なうのお蝶何人にか欺かられ横奪されて仕舞つたぞやと思はずも組だる兩手つき出を鐘にビツクリと散る櫻見向きもやらず騷ぐは互ひの胸の嵐上るは互ひの顏の雲なり

何と仰しやりますぞ娘お蝶は何人にか欺らされ横奪されて仕舞つたとはト七兵衛餘りのことに膽うち潰して泪も出ずサア夫はまた何と致した譯その譯聞かせて貰

ひませうかと恨みがましく膝すり寄すれば大石は太息つく〳〵漸う〳〵に面を擡げ「イヤ七兵衛とやらまべし待たれよ其方は何にも知りやるまいが是には段々仔細のあると當今我等藩中にはいてはチト込入つた仔細あつて藩士の面々兩派に分れ家の御政道向我意ほまゝに取賄はんと種々君侯に對し奉り不忠の所行に及ぶ族も少からぞいろ〳〵と拙者共も竊かに心痛致す上意を幾して右樣の奸計に及んだるも察する所矢張其事に關係の倭人原の作略から起つたとかと思はきる詮議の手懸全く絶えその探索相叶はぬといふても無しこりや一詮議致さねばなりますまい我等は姓名を餌にして勾引にひとしい惡計を働らいた其の曲者ら此儘にならぬは勿論の事、本陣小椋屋方から案内して諸事相談に及んだとあるからは幸ひに多年來出入を致す彼の小椋屋拙者是より彼等方に罷越し直々仔細を糺して呉れやうイザ一同ふと促されて七兵衛は心も空をりや七兵衛も御一緒に何の是がマア此儘にぢつと致して居られませうぞサア〳〵早くと急がし立て我先づ眞先に我家をぞ馳出ける



挿畫第三圖

●第五

此に浮田侯といへるは隠しつゝ扨も止みなんと古歌にも見えたる山城の大荒木の古蹟今は開けて幾尋の石垣高く淀川の流れに沿ひ堀入るゝ水も常しなへに緑をなしてつきせぬ城池を構へ八幡山崎時鳥の啼く音聞ゆる限りを領地としく時めき栄ふ相應の大名なりけるが移り變る世の習ひには何方も同じ藩論の沸騰避けがたくして蝸牛角上の爭ひに均しき黨派の軋轢思へば小兒の戯れに殊ならねど菖蒲草の太刀執る身にも尚捨難きは忠義の勤めにて或は京師方或は關東方と假初の戯れにも双方に色分をなす紙幟西に靡くあれば東に靡くあり縺れに縺れたる時世の有様なれば此末如何成行いて如何治まるとかと窃かに心を痛むる人々も多きが中に藩士の一人に山科左太夫といへるは其身大臣の家柄でこそ無けれ主君の覺えも惡からずして一時は側用人と云ふ重役をも勤めし身の上殊に年既に四十に近く智惠分別も文武の嗜みさへ千人の上に立勝れたる老臣なりとて日頃關東方の一黨の杖柱と頼まれ藩士の推尊れさ〳〵家柄の重臣に讓らざれど故ありて去年身斥けられ今は君側の人にあらず日影に疎き家櫻看さ〳〵

第三圖

花盛りの春には逢へど徒らに濺ぐは時を慨む泪のみにて圍碁に茶に事寄せつゝ、永き春の日をさりげなく過せども尚その君を戀ひ國を懐ふ下心には水鳥の足搔しばしだに休まる間とては無く朝には高峯の花を眺めて何時咲出ん我身と喞ち夕には大空の星を望みて軈て亂れ行く世の有樣を嘆き兎角快々として太息がちに日一日と過しけるが中にも取分け心に懸るは此頃の主君の素振とて今日も亦鬱々と一室に引籠り何事をか頻りに屈托顔に見えたるが良ありて又何か思出せしとなどありと覺しく俄かに身を起しつゝ手を打鳴らして誰かある蝶は居らぬか蝶、蝶と呼立る聲に應じ軈入来れるは新參の侍女お蝶なりけり

お召し遊ばしましたかと手をつかへてお蝶は三指の折目正しき口上も未だ人慣れぬ籠飼の鶯只恥かしさのみ一ぱいにて閾の外に俯き坐せば左太夫はニツコと打笑みイヤ蝶其處に居ツたか今日は其方にチト改めて申し聞かせて置かんではならぬ事がある近う〳〵と言ひつゝ見臺片寄せて膝れし前めぬお蝶は少しも合點行かず心の中に案じる樣は我身今度姫君のお相手をなす爲め當お館へ御奉公を仰付かられると云ふ事にて此の屋敷へ伴れられて来しよりは日數も既に一

月餘り上つ方の行儀作法精出して見習はぬにあらねども何故にや今日までも此のお屋敷にのみ留置かれて御殿へとてはツイぞ一度も召出されず加之ならず仔細ありとて日々奧向の用事のみ言付られお屋敷の門外へは固く禁じて一足たりとも出ることを許されず掟嚴しき内外の取締りは押なべての風儀かは知らねど合点行かずと思ひ居たるに今改めて旦那樣が我身に言聞せる事ありとは仔細ぞあらんと娘心の怪しくも又心元なく案じ遣られ黙然として俯き居れば左太夫は軈て言葉を和らげイヤお蝶左太夫が只今改めて其方に申し聞せたい一儀と申すは餘事でもない其方も當家へ參ツてからは最早殆んど一月餘り屋敷の樣子も追々承知致したであらうに依て委細の譯を申し聞せるが今度其方が當お館へ御奉公を仰付らるゝことになツたのには段々深い仔細がある其譯は今公然に申されねど何に致せ姫君のお相手なぞとはホンの一時の口實にて其實は昨今世上に風評高き薩長方の内意を受けお家の大事を引起さんと謀る惡人原の爲す仕業我君御放埒の心とお迎へ申して種々不良の事を企てんとの計略に出し譯なれば大事に係はる其方の一身おろそかに思ふてはなりませぬ就ては拙者にも少々存じ寄の

次第もあつて彼等が惡計の裏をかき其密謀を挫かん爲め其方をも詐はつて斯く當家へ召伴れ參つた次第なれば事落着に至るまでは斯て何時までも當家に預かり置かねばならぬ人に見咎められる懸念もあれば他出は素より當分の内は父七兵衛方へ消息等も相成りませぬ但し父七兵衛方へは當家より夫々厚く手當を與へ折々其方の樣子をも告げ知らせて聊かたりとも心配致さぬ樣に取計ひ置けば父七兵衛とても必らず〳〵安堵致して其方の奉公を喜び居るならん夫に氣支はチツトも無ければお家の安危に係はると云ふ大切な場合能く〳〵聞分けて神妙に當家に奉公しく居つて貰はんではなりませぬ何うぢや合點が行ましたかと思ひも寄らざる主人の言葉にお蝶は且つ驚き且つ懼れ此のお屋敷へ來てから以來掟嚴しい内外の樣子何でも仔細があらうとは心の中で察して居たが然いふ譯であつたかと始めてそれと樣子を知ては最どしくおそろしさ又心元なさも一入増さり頓には答へも出かねて悄然として尚暫らくは俯き居れば折しもバタ〳〵と椽端づたへに父上只今歸りましたと樣子ありげに入來れるものは左太夫が一子に左太郎といふものへ

●第六

オヽ左太郎待かねた京の樣子何うであつたなと膝立直して左太夫は蝶を見かへり蝶チツト内談がある其方は暫く彼方へ下つて今朝申付けて置いた茶の用意なりと致して置けとの事に蝶は畏まつて坐を立上り其儘茶室の此方なる鎖の室といへるに引退きたるがさるにても氣懸なるは今主人より言聞されたる當藩中の騷動といふ事如何なる譯かは知らざれど其事親しく我身にさへ關係ありと云ひ又當の館の一大事なりと聞くにそも如何なる事にてさる騷動の起り又何ういふ譯にて其事親しく我身に關係ありといふにやその仔細こそ知りたきものなれと娘心にもいと心元なく思ひて挽さしたる茶臼の前に悄然と坐に就けるのみ暫くは爲むよしも無くて只鬱陶として俯き居れば程遠からぬ次の室なればの聞ゆるものは左太郎が美しき聲音なり如何なることを語らふなやとお蝶は猜ましくて思はねども耳欹れば此時左太郎は一咳しつゝも何か俄かに悲憤の氣味にて父上は聞きなされませ先づ長州の内情とては斯くの次第で御座いまする就ては必らず公儀に於ても今一段の嚴重なる御沙汰がなくては叶ひますまいイヤその

嚴重なる御沙汰こそ最早此程藝藩の手を經て斷然同藩へ仰出されお相成つたとも申します其大略は罪に依て毛利家御父子は終身の御勤愼又二ツには其の御封祿中拾万石を削られ其外三人の家老職へは夫々切腹の嚴命是にてお受けを致せば好し若し同藩に於て彼此と躊躇致し其御沙汰を奉ぜざるに於ては最早斷然と御親征あらせられ一藩滅亡の時も近日の中に在らんと專らの評判で御座います夫等の諸藩と氣脉を通じて日ごろ非望を企て居る彼の大橋等の一黨今日の如く跋扈致して居りましては愈々お家の大事となります最早猶豫は相成りますまいが如何思召されますかなどしめやかに言ふ

如何なる故と其仔細定かには知り得ざれどお蝶は此等の噂を洩聞きて獨り心の中に案ぜる樣はそも毛利家御父子とは誰の事御親征とは何の事今左太郎樣のお言葉の端に日頃非望を企て居る大橋等の一黨とやら仰しやつた其大橋樣といへるは慥か當お館の御家老職と聞いて居たるが非望の企てとは何の事去年京都で長州樣の騷動があつてから以來といふものは何とやら騷々しい世間の樣子聞く事も〳〵皆な怖らしい噂許りなるに況して此のお屋敷へ上つてからは皆樣の

仰しやることが何うやら又戰爭でも始まりさうなお話許りぢやお屋敷といふものは斯んなものかお武家方といふものは斯うした譯か何にしても心元無し夫に付ても仔細あつて詐拵へて伴れて來たのぢやと今旦那樣の仰しやつた我身の事父さんは何と思ふて案じて居なさるであらう斯うして無事で此屋敷に勤めて居ることを能う知つて居なさるであらうか又は知らずに案じて居なさるであらうか厚く手當を致して置た其方の樣子をも知らせて遣つてチツトも心配せぬ樣に取計らふて置た程に氣支ふには及ばぬと此樣に仰しやつては下さつたもの丶日ごろ苦勞性な彼の父さん何と思ふて案じて居やうも知れぬア丶此りや一度逢た上で切々樣子が聞かせて置きたいが一足たりとも御門外へ出ることは相成らぬとの嚴しいお言葉手紙を遣りたいにも托けて遣らう人は無し此りや困つたことになりましたと今更に囚徒人質にも均しい我身の上それと始めて心着きては空怖ろしさも亦一入增りて斯くて行末何うなることかと只管胸のみ痛めるが譯を明かして泣縋らんにも此家の奥方とては去年病の爲に亡せられしとて今は後添の人だに見えず我身と一緒に奉公する三四人の侍女下婢等は何れも〳〵口喧ましく意地惡

げなる人のみなれば滅太なとは問はれもせぬとお蝶はほと〱心の遣端なくその日も既に思案に暮れて尚ほ幾日か物憂き月日を重ねけるが兎角思ひ餘りて得も堪られず軈てやう〱案じ出たるは子息左太郎のことなり過ぐる日我身が此屋敷へ来りしより御奉公の見習せよとて手習せよ花入ること覺へよと旦那様の仰しやるに付け御親切なお手本書いて下さるも左太郎様香花の燒方入様教へて下さるも左太郎様いつそ御親切なお方と思はれるに況してお年に似合はぬ御發明旦那様にも内外の事何くれとお心置なく仰しやり付けられる様なれば彼方に御様子を伺つたら何かの摸様も知れるであらう寄邊渚の浮草の波にせかれて漂ふ身誰を頼まん様もなき不便をや察して下さらん不幸をや憐れみて給はらんさうぢや〱とお蝶は窃かに思案を定めたれば人無き折を窺ひて或日左太郎の部屋へと忍び行きける

●第七

花は若葉と茂りあへて下蔭くらき五月闇卯の花の咲亂れし垣根のあたりのみ薄月夜さを初夜過の事なりしが左太郎は深く一室に垂籠て今しも短檠を挑げつゝ何か頻りに書見の最中と見えたり四邊に人無ければ別けて入りにくゝ然ればとて人ありては尚更問にくき我身の密事なれば如何はせんかと踏らひつゝお蝶は暫し簀の子の此方に彳み居たるが端無く蛾の飛来りて短檠にあゝらんとするを逐ふとて左太郎青表紙を取りて此方ざまに拂ひさるが其虫の此方へ飛かへすに依て思はずも見送りさる左太郎が目と我目と衝突さりお蝶はハツと思ひしが彼方もまさ驚きたる体にて誰ぞや蝶では無いかと咎められしを汐にハイと答へて面伏せに其處に座に着けば左太郎は大きに不興乃氣味にて身をそさらせ何用ありて今時分獨り我が部屋へは来しぞと問ふ

れ蝶は何故にや羞らしさのみ先だちて頬には言葉も出ず暫くは只モヂ〱としてて俯き居さるが漸う〱にして口を開き左太郎様何うぞお許し遊ばして下さりませチツト折入て蝶がお願ひが御座いますと言へば左太郎は倍々不興の体にて

何と申を折入て私に願ひがある如何なる用事かは知らねども今は折惡ければ明日の事に致して呉よとて取合はずお蝶はいよ〳〵接穗なく悄然として尚も暫しは俯き居たるが明日となりては又彼此と人目の稠きに妨げられ問寄る汐も六かしからんと其儘には得去りもやらず御書見の所をお邪魔致しましては相濟みませんが貴方で無うては叶はぬお願ひ何うぞ悲憫と思召してお叶へ遊ばして下さりませ人目を忍ぶ秘密の用事明日と申しては又むつかしう御座いませう何ぞお許し下さりませとお蝶は重ねて問返せば左太郎は尚もます〳〵身を退させ大事の願ひと申すからは尚以て此では聞られませぬ今日は朋輩の女達も皆なお使に出て留守の樣子奥向も手少なるに父上の御用がありませうから早く彼方へ往て下さい此はお前方の來て好い處ではありませんと承引く氣色更に無しお蝶はいよ〳〵困じはてアヽお情ない仰しやり樣他人に聞られて好いとなら態々斯うして人目を忍び厚顏しくもお部屋までお願ひに參りは致しません他人で分る用ならば態々斯うして折を考へ大膽にもお書間まで伺ひに參りは致しません言ふに言はれぬ心の苦勞他に問談合すべき人さへ無ければ羞をも忘れ身をも忘

れてお願ひ申しに參つたので御座いますは日頃にも似ぬ管ないお言葉と心の内には恨みの數々なぜお惡いので御座いませうと思はず泪さしぐめば左太郎も不審の体暫しは互ひに俯きたるのみ重ねて言ふ由も無りしが折しも垣根の此方より又もや飛かへりし以前の蛾羽音かしましく飛來りて再び短檠に懸らんとするに打驚き左太郎は身を起しつゝも在合ふ青表紙を取て矢庭に此方へ拂はんとすれば拂ひ損じて虫は軒前に舞ひ揚りその煽られし冊紙の風に燈火は消えて暗黒となりぬこれはと許りお蝶さへ覺えず驚きて聲打揚げしが折も折とて遙か彼方の奥の室には生憎に父の高聲左太郎〳〵と呼立つゝも椽側づたひに軈て此方へ出來たる摸樣なればお蝶は尚更左太郎さへ大に慌てふためきつゝ見咎められては惡しかるべしと避けんとするにも眞の闇何處を其處とも見分かねば彼方此方と立つ居つ途方にくるゝその間に父左太夫は手燭を取てハヤ程近く一方口なる椽先より入來り悴用事がある何を致して居るぞと言ひつゝも火をさし翳して窺ひ寄りしが此場の樣子を見るよりもハツと許りに並ならず驚き呆れし樣子にてやゝ其方はと思はずも一聲高く呼びたるまゝ足踏止めて内へも入られず跡へも

引かれず汗を握て迷惑ひ居り、仕損じたり如何はせんと此方は尚更狼狽極まり穴にも入りたき心地にてハツと差俯きたる儘言葉もなき左太郎よりもお蝶は尚更面目なく今しも左太夫が高聲に驚き惑ふて遁げ隠れんとして却て身の居處さへ端なく變はり生憎にも左太郎が側近くうろたへ坐し居さるをにさへ心付き淺間しとも羞らしとも更に譬へんに物無く身内只一面に冷たき汗にのみ浸されて戰々と戰きつゝ小さくなりて俯き居れば此時左太夫は何思ひけん俄かにフツと携へ持たる手燭の火を吹消して縁側づたひに元来し方へ二三歩許りも立戻れるが納戸の方に打向ひて態と慌たゞしげに手を打鳴らしコレ蝶は居らぬか火の消えたるぞ蝶は何れに居るぞハヤ火を持て參れと聲高に呼立つゝも再び彼方於奥の室へと引返したる

●第八

お蝶は漸う息出る様に覺えて身を起せしが胸の動悸は少しも静らず早々に左太郎の部屋を立出で先づ納戸に来りて忙はしく手燭の用意なしつゝも再び元の部屋へと立還り見れば左太郎は今しも既に父左太夫の書斎に起き事の言譯中など

ゝ覺しくて影だに見えず其邊に取散らしたる儘直しもやらぬ物の本など見るにだに今の爲体思出されて淺間しさ遣る方なく如何にして斯る事とはなりけんと案ぜるに今更何事も只夢の様なり我身が今宵此の部屋に忍び来て問はんとなしたると云へば先づ第一に心元なきお館の大事を始めとして國にあくまはきたる我身の成行伏見に殘りし我父の事此末如何なる難儀が懸り如何なる憂目に逢はんも知れずと其を氣支ひて洩れ聞らんが爲めなりしに何と思召してか左太郎様が彼の御不興げな今のお言葉夫さへあるに生憎に燈火の消えし真最中へ折も折とて旦那様が俄かのお越し如何に何なれば迚て彼の暗黒に男と女たゞ二人にて居し上はお疑ぐり被ぶりても詮方なからん兎にも角にも人目を忍び来まじきお部屋へ来れる我身お叱受けて辛き目見るは今更少しも厭はねど跡形もなき濡衣に御疑念懸りし左太郎様へは何とお申譯をして好からうやら思へばひよんな事になつて仕舞ふたものアゝ返す〲も憎いのは彼の飛んで来た今の蛾とやら彼れゆゑにこそ此の始末と恨みつ慨ちつ起つ居つ切なき思ひに閉られて暫しは他念もなかりしが良ありて心付きいや〱斯うして此に居られぬ今頃は左太

郎樣定めし御書齋でお叱受けて御座るであらう身の濡衣を乾かねて嘸かし困つておいでゞあらう我身の不調法から事起つて御身に懸りし此場の難儀我身からお詫を申さいで誰がお詫を申さうぞ我身からお申譯を致さいで誰がお申譯を仕ませうぞ然うぢや〳〵と覺期を極めて怖々ながら談處を立出で奥庭を引繞らしたる椽側づたひに窺ひ寄れば書齋を漏るゝ燈火の影はいと幽かにして雨氣を含み木の間ほの〴〵と風さへ薫りて垣根に白き卯木を照らし空に知られぬ月影もはや更行きつゝ夜中となりぬ

斯く思ひ定めて歩みを前め書齋の前へは來れるもの、身の怠りを案じ思へば我さへ同じ疑念の懸る身先づ何と言ふて疑ひ解かん如何に言解きて詫言せんと彼に斯くに案じ迴らせば胸は再び無明の闇路踏む足さへも捗々しからでお蝶は幾回か躇らひ居けるに折しも書齋の彼方にありては並々ならぬ叱聲物音此は左太夫が怒りに乘じて我思ひ人お怠たりを懲さんと打などをるにや何にしても只事ならずと我を忘れて一散に走り寄り隔ての襖開くる手遲しと一歩踏み入りつ、も樣子を看れば此はそも如何に書齋の裡には左太郎ならで思ひも寄らぬ一人の

曲者面眉深に包みたれば如何なる人とは得知らねど夜目にも著きだんびらを真向に振冠り隙間もあらば斬つて落さんと立構へたる大上段其を又斬らせじと左太夫は在り合ふ床飾りの鐵如意執つて坐りしまゝにイザと許正眼に付け居たり此は一大事と驚き惑ひてお蝶は生きたる心も無く宙を飛んで先づ納戸の方に馳せ返へし曲者あり〳〵と聲を放ちて救助の人をと求むるに夏の短夜宵惑ひして既や寐ぎさなく睡りに就きしか表玄關中の口皆な寂として出合ふ人とては更に無し斯くてはならじと心元なく又馳せ戻つて廊下を繞り一大事で御座います早く出合ふお人はなきか左太郎樣〳〵と聲を限りに左太郎を求むれど如何せしにやその左太郎さへ一聲の答へだも聞こえず此は何とせんとお蝶はいよ〳〵途方に昏れ氣も半亂に取つ置つ暫しは爲すよしも知らざりしが兎角してハツシ〳〵と切結べる書齋の太刀音もやがて次第に靜まり行きぬ若しかあらぬか深行くまゝに子夜の鐘さへ遠音を送り陰に沈みて何となく諸行無常の聲さへあればお蝶はいよ〳〵心元なく恐る〳〵書齋に近づきて樣子如何とさし覗けば火は幸ひに消殘りしか行燈華やかに輝きて左太夫は其處にをり誰ぞと咎むるまゝに覺えぞ

ホツと太息を吐きハイ私で御座いますがと言ひつゝも書齋の裡に立ち入つて若しやお怪我ハと尋ぬれば左太夫ハ何故かや痛く勞れし樣子にて默然として暫くハ答へもなし

血汐も其處らに滴たり居り顏色さへも常にハ非ざさてハお怪我ばしなされさかお疵ハ重手か如何いふ御樣子とお蝶ハ又もや驚き惑ひ折も折とて左太郎樣何處へお越しになつたのやら此りや何として好からうと狼狽へ惑ふお蝶の面体左太夫ハ屹と眼下に睨まへつゝも痛手を押へてやう〳〵に身を引起しコレ蝶靜かに致さぬか騷ぎをるな茶室へ參つて取敢へず水一ツ汲んで來て吳れやれと卷臺力に先づ坐に直りける

●第九

思ひも寄らぬ今宵の變事に何事と思出る暇もなくて水よ藥よと獨り心を痛むるお蝶ハ娘心にも最甲斐々々しく左太夫の介抱をなしつゝ軈て密かに知邊の醫師を迎へて左太夫が負たる疵の治療を請ひなどするに疵ハさして重手といふにハ非ざりしも脇腹より乳の邊りへ掛りし太刀疵一ケ所治療をなす迄の手當宜しきを得ざりし爲めにや血を多量失ひたりとて殊の外疲れを覺えぬ兎に角に世の中騷がしき當時の摸樣刺客兇賊が斯る屋敷にさへ立入りて兇行を逞しうせんとをる程の世の樣なれば只さへあるに況して敵黨大橋掃部が一黨の猜みを受くる左太夫の一身危きと物の譬の限りにあらねど何を言ふにも當時主君の不興を被りて勤愼中の身の上諸事荒立てハ相濟まじと只管世間の聞えを憚られば翌朝より追々左太夫が負傷の始末を聞傳へて憤激なしつゝ見舞に集る一味の藩士も少からざりしが左太夫ハ飽までも夫等の藩士の憤りを慰め縱ひ大橋方の一黨に於て如何なる陰險兇暴の手段を取りて我等一黨の忠義を妨げんとするものあるも曾以て意に介さみ給ふとある可らず我等君家の御爲筋を謀らん爲なれハ素より一身

を亡きものにして思ひ立たるとなれバ刺客兇賊の手に懸りて縦しや一命と落をとありとも聊か以て恨みとなすに足らず只此の上ハ各々方にも愈々倍々身の振舞を慎み誠意赤心を以て我等が忠謀を貫くの覺期専一なりとて固く執て動かざるにぞ一旦並々ならず憤激したる藩士の面々も聽て左太夫の言葉に服して先づハ事穏便に鎮まり夫より後ハ只夜毎に一味の藩士等兩三人づゝ左太夫が屋敷に見舞ひ來り忍びやかに左太夫を警護するのみにて已みぬ

折しも夏の初めなれバ治療成し易き時にハあらねど日を經るまゝに醫藥看護の効空しからで左太夫が疵ハ次第に快方に赴く樣なれバ夜の目も合せず今までハ看護介抱にのみ他思なかりしお蝶やがて思出さるゝハ彼の左太郎が事なり其人ハ往る日主人左太夫の書齋に狼藉者の忍び込みたる夜父の疑ひを解かんが爲めにその書齋に入りしと思ひしまゝ其後更に行く所を知らず後に聞けバ仔細ありて彼の夜俄かに京に遣ハしたりと左太夫が時々人に物語るを洩れ聞くのみ其儘絶ヘて家にも歸らざるハ京都の用事未だ果ざるにやさるにても是程の大事我家に起りて現在父なるもの兇賊の爲に重手を負ひ斯くまでも惱み居るに其を知らざるとハよもあるまじ何故に斯く何時までも歸り來ぬにや合點行かずと案じ遣れバ其夜我身の怠りから事起りて憶りなく父左太夫の疑念を受けさせ互ひに並ならず心を痛め合ひたる事をしも思ひ出され心苦しくも又羞かしくもあり忘れんとすれど更に忘られず餘りに思ひあまりて寧そ打出して其譯を主人左太夫に尋ねんかと夕暮近く蚊を逐ふてその枕邊に伽せし夜又ハ藥餌を侑めんとて其前に出し時など人なき隙を窺ひてハ口先まで綻ばし出せるとも屢々なりしが何故にや其期に臨めバ心一向に臆れて何時も〳〵問ひ果せず只下心のみ羞かしくなりもて來つ顔打赤めて其場を引退くが常なれバア、氣支ねし心元なしと獨り窃かに心の中に案ずるのみ本意ならずも今日と過し昨日と暮らして日毎に添ふものハ只だムヤクヤと思ひの種のみ何故に斯く心に萌るかと我ながら我身怪まるゝ迄に思ひ屈しつゝ隱そとすれど穂に出る籬のを、き秋さへ暮れて露の情の僞りなけれバ幾入染めし下紅葉色さへしるく櫨の葉のうらはづかしき冬ともなりけり

左太夫が疵ハ秋頃より全たく癒え寒さに向ふにつれてハ折々痛みを覺ゆると無

きれしもあらねど今ハ枕に就く程の患もなく殊に日ごろ剛毅の性質とて年老たれど氣力少しも衰へねば瑣細の患みに人手を煩はす様のことは曾て好まずして看護介抱の事さへ何時よりか自と已み今は常の如くすが〳〵しき身となりしと見えたるが其の疵の全く癒えたる頃よりして何か我身の事に付又新たに一段の心配など添へたる模様にて重陽の節會に菊花の杯を祝ひ亥の子の式日に餅の膳進むる序など折に觸れ時に隨ひて蝶其方は我が屋敷に来てより最早幾百日になるよな我が疵は其方の介抱に依て癒しよな我身は其方を他人の様には思はぬなど情ある言の葉を言出す毎に愁然として何事をか深く心に案ずる様なりお蝶は敏くも目睫に悟りてそも主人左太夫は何事を案ずるにやあらん如何なることを思ふにやあらんと是もまた心の中に人知れぬ一ツの氣苦勞を加へしが例の下心に羞かしきこともあれば夫も只詞なしと思ふのみにて滅太には問もやられず何であらうか彼であらうかと心の中に案じ煩ひつゝも安からぬ月日を過したるが其年もハヤ何時しか雪霜におし詰て訪ふ人も稀なる師走其の日の事なりけり何時になく前夜より一味の藩士等入り替り立替り屋敷に来りて何か夜深くるまで主人左太夫と密談あり様子ありげに見えたるが其の翌朝主人左太夫は一室にありて我身を呼ぶこといと頻りなれば何事ならんかと心元なくお蝶はやがて一室に到りて見るに怪しむべし左太夫は常にもあらず身に新らしげなる麻上下を着用なし端然として坐ずまひ居り合點行かずと心臆れてお蝶は恐る〳〵先づ側近く坐に着けば左太夫は軈て低たる首を擡げて漸う〳〵に膝おし前め、言ふて益なき事なれば今日までは其方にも深く包み隠して何事も話さずに居つされど仔細あつて今朝俄かに君侯よりのお召し一旦登城を致した上は如何相成るやも測り難い左太夫の一身又面會の程も覺束なければ委細の様子を言ふて聞かせる其譯は先般君侯の仰せを受けし大橋掃部が使の者ありと詐り拵らへ窃かに我等一味の藩士を伏見まで遣はして其方を奪ひ来りしは當時君侯御放埒の御心を迎へて我意を恣いまゝにせんとする敵黨一味の奸計を妨げ當お館の御大事救ひ奉つる端にもなさんかとの誠意に出たる計略なりしが身不幸にして隠れたるより顕はるゝ、世の譬へ日外や敵黨において忍ばせたる曲者共我屋敷の書齋に押入り窃かに我身を失はんとなしたる折測らずも其方を見認めらしが忍入つさ其賊は敵黨大橋

掃部が腹心の若黨に横堀善太と申すもの先年來彼等の隱密となつて近畿諸國を徘徊なしをり先つ頃伏見に漂泊中其方の面体をも見知り居る趣にて山科左太夫が君侯のお聲懸りなる土人形師七兵衛の娘蝶事を匿まひ置くとの風說は何時となく世間に廣まつたり夫さへあるに倅左太郎儀以ての外の當夜の不始末大事の爲めに匿まひ置く其方を左太夫が倅めに不義致させしと評判立られては第一此の左太夫が主君に對して一分立たず直樣其場に於て我手に懸け成敗致して惜からぬ奴ながら何を言ふにも當時勤愼中は我等が身の上事荒立つては世間の聞えと枉げて遠慮致せしと申すも其真實は子故に迷ふ親心只た一人の倅左太郎を斯る私し事にむざ〳〵と殺しともなき故なりと左太夫は聲濕ませて尚も再び言葉を繼ぎ左りながら切角の心盡しも皆な仇となる敵黨の讒訴讒言斯もあらんかと倅左太郎は其夜直樣公用に托けて京師へ遣はし絕て屋敷へ近づけざりしに其甲斐も無くうま〳〵敵黨が讒間の種となり斯許りの小事を基として我等一味の者共が忠義の企やみ〳〵敗亡するに至りしは殘念に思ふぞや今日只今君侯より俄のお召し即刻出頭とあるからは言はずと知れた敵黨が讒訴の罠に陷つて大事の

敗となつたる我等所詮斯くなる運命ならば飽までも君侯をお諫め申し謝すべきことは潔よく腹搔切つて謝し參らする左太夫が決心ぢや就ては後刻左太夫の身に若し萬一の事ありしと聞くならば其方は早速人知れず當屋敷を立退きて何處へなりとも遁失せ呉れよ必ず〳〵敵黨の目に懸つて捕へられ左太夫が死後の潔白汚して呉れるな是れ今生の頼みなるぞと言ふもなか〳〵泪の裡やがて懷中より一包の金子取出し聊かながら何かの手當とお蝶の前におし据ゑつゝイザ參らんと立上られお蝶は始めて仔細を聞知り或は驚き或は恐れさういふことであつたか　今更に何かの摸樣を案ずれば先だつものは只泪のみ悲しさ切なさ遣る方なくて餘りの慌しさに答へも出ねば暫しは其處に身を投伏したるまゝ只生体もなく打泣き居たり

●第十

雪に難む鳥羽繩手常さへあるに戰後の夜路血汐は殘の雪に塗て鹿の子まだらに奮闘の痕を留め屍は枯野の草原に横はりて兵者共が夢の名殘今はいづくに迷らんと踈んぜらる四日の月さへ播曇る彼方の空に影傾きて風腥さき八幡の森蔭

を闇に紛れてすた〳〵と供をもつれぬ怪しの女只一人彼方此方と見透しつゝも焚棄てし篝火の此方に立やすらひて思はずホツと太息を吐き思ひも寄らぬ戦争騒ぎに御城下を遁げねばならぬ屋敷の混雑取分ゝ我身は御登城前に御主人様から呉々もお諭し受さし身の落付人目に懸つてはなるまいと命から〴〵漸う〳〵御城下をば脱出たれど差詰め心に懸るは何よりも先づ伏見に御座る大事な父さんお目に懸ツて仔細を明かさば何かの様子も分らうかと只逢たいが一心で伏見へ帰つて家はと聞けば昨日からの戦争に皆な焼失せて御近処に問ふべき人さへ泣くばかり墨染寺様の御師匠様の御慈悲に依て漸う〳〵知れた父さんのお行方は何でも其方を氣支ふて戦争の始まる其前に御城下へ行つさに相違ないと仰しやるゆゑお寺に暫らく忍んで居よとお師匠様が御心切にお留めなさるも聞入れず今宵窃かにお寺を脱出し斯うして此邊までは来たなれど噂に聞けばその御城下さへ今は戦争の衢となり行くにも行れず帰るにも又帰られず迂路々々と夜路に迷ふ便りない我身の上常さへあるに此の物騒な戦争最中若もの事でもあつた時にはマア何として好からうぞと手さへ凍えふ取つ措つ獨言ちたる其折しもうね

て窃かに尾け来りしなんツカ〳〵と進み寄たる一人の曲者矢庭に女の帯際執へて言ふ由ありと引戻しぬ引かれて是はと驚き惑ひ身を捻らして遁げんとすれば然うはさせじと曲者は尚も後へ引戻す女の力甲斐なくて引るゝ儘に蹌めき〳〵雪解の路に足踏辷らせてドウと許に大地に伏せば倒るゝ途端に帯際に結びし包みの空解なして執し賊さへ諸共に立もとをりつゝ尻居に倒る其小包こそ大事の金子夫取られてはと起上つて取付く女、面倒なりと蹴放す曲者、引奪つて遁出んとするに折しも又もや彼方より打喘ぎ〳〵一散に馳来きる一人の男闇に惑ふて矢庭にバツタリ曲者と身を衝突せ是はと驚く後ろより憎くき物捕其品戻せと又もや此方にも一人の懸聲是は如何にと四人の男女闇に紛てれ西又東返せ遣らじと入亂れつゝ万字巴に揉合ふ程に縺れ〳〵て何時しか取違へたる男の小包、夫とは知らず馳出る件の男も女の一品、是さへあれぱと馳出るを遁さじとや件の曲者はのれと言ひさま引く手も見せず忽ち射出す一發の短銃逸れたる丸に掻立られてパツと燃立つ傍への篝火に身を避けながらも左右に分れて思はずも互いに顔見合せや、貴方はと下なる女、さういふ其方はと前なる一人の若侍士、仕損

じたりと一方よりハ又もや射出を一發の砲聲にハツと二人ハ身をすぐませて袂を小楯に大地に平伏し飛來る矢丸と避けんとすれバ避くる途端に火ハ又消えて咫尺を辨ぜぬ闇夜の杜蔭アツと向ふ魂斷る聲にあれハと再び驚く男女、前後左右に遁惑ひて互ひに綾なき闇を捜れバ深け行くまゝによしみ〴〵と跳足にしむハ雪間の畷路小笹に渡る風のみ答へて何れを夫とも見分かずなつたり

（序ながら本篇第三回第四回に大石とあるハ何れも大橋の誤りなり）

●第十一

年を經て庇にかゝる片枝に見かへる許りの老木の梅心當にて訪寄る門に未だ下風ハ薰らねど有繋に今日ハ一月四日算ふる程の日の春を一輪づゝの時知顏世を知らず顏なる向島洲崎村あたりの別荘に人、年と共に新玉祝ふたまさかの催しとて常にも增さり賑々しく多くの男女を召集ひ誰憚らぬ宴會ハ華族某男爵の御隱居一樹園殿とて未だ四十の坂多くハ越さぬ御年なるに何故にや世を味氣なく思ひ捨たまふ所ありて數年前御家督を若殿某君に讓られ錦衣玉輅の榮を棄て、此の別荘に退隱せられしより此方ハ餘生を一竿の風月に寄せ常に足を擧ずて角田の流れ此方へと濁せしとも無く引入れし汐の温みに江南の春色早く通ひて花をおくる使者に身を屈め拜するとハありとも元朝三日の賀辰にだに柴の戸半引寄せて門に王侯の車を俟たねバ軒近く心を澄し朝夕の友となり然ながらに万代を號ふ松の嵐を寐て居て聞き宰相天に朝そるも亦知らぬいと閑かなる生涯なるが今日しも日頃と樣變りて斯く賑々しき宴會の催しあるハ御家に取て又となき大切の祝日御本邸よりの仕向けに依りまた已み難き吉例なればなり

正午の客も未だ日短の折柄とて一巡二巡と巡らも盃祝ひさゞめく聲もろ共に日脚も何時しか西山に傾きしが出たく／＼に醉のみ廻るや頓て仕度なく落かけし袴の腰打拔かして誰一人立歸らんと言出るものも無く居並ぶ多くの杓女綺羅を重ね錦を列らね彈く三味線の糸ならでテグス○引いての強達者には散々に強付けられ調子の狂ふ手皷ふ謠さへ交る亂拍子主公一樹園殿を始めとして滿坐ひとしく興に入りたるその中にも年來の老臣とて御本邸の家令かねては若殿後見の大職をも勤むる大橋渉といふは老年に似合えぬ達者もの糸竹の聲涌くが如くなる滿坐の中より揚々と立上り御前近く坐を前めて賜はりし祝盃恭しく返し參らせつゝ言ふ樣は新年の御祝宴年毎の何れは御坐りまそれど取分け今年は若殿樣お召出しの御沙汰さへ御坐いましての此の初春お家萬々歳の御繁榮さへ幾久しく想ひ遣られまして斯樣に目出たい事は御坐りませぬ思へば先年王政御維新の砌御家中心得違ひの者共が徒黨に依つて危うくもお上を要し奉つり既に東軍方に内意を通じて朝敵ともならんと致せし處を御前樣御英斷の思召を以て御藩中の方向を御定めに相成り俄かに翻つて官軍方に力を戮はせつゝ伏見鳥羽の戰

爭にも勤功さへ少からざりし廉を以て朝廷の御疑ひ立どころに解け今日あるに至れるは是世の譬にも言ふ禍を轉じて福と致したとやら申そものお家の安危浮沈の機は當時の御英斷一ツに係つたので御坐りました夫故にこそ毎年一月四日彼の伏見鳥羽戰爭の當日を以てお家に二なき大切の祝日と定めさせられ即ち斯くの御祝儀數ならぬ我々までも今日まで生殘りて年々斯る目出たきお席に尊顔を拜し奉つることを考へまそると其折の事さへ思出されまして今更難有しとも辱しとも感涙に堪へた次第で御坐りまそと樣子ありげに言出れば一樹園殿にも至極滿悦の体にて笑ひを含ませイヤ渉、我々主從一家の者が斯く只今までも存らへ合せ目出たき太平の新年を祝そるとの出來るのも皆是れ難有き朝廷の御恩に依るとは申しながら只今其方の申そ伏見鳥羽の戰爭一條其砌其方の意見を容れて朝命を奉じ東軍に叛かずば我等も矢張會津桑名の各藩と同樣に藩士の多くは名も無き不義の戰爭の爲めに妻子兄弟皆な死別れ生別れ剩さへ藩祿をさへ削られて見る影もなき降人同樣好き世の胡盧となるべきを救ふて呉れしは其方共が是れ偏に忠節の致そ處今日只今斯く祝宴を設けて一家の繁榮を祝そるに付け其方

が當時の勤功を決して忘れ致さぬぞや夫に付けても氣の毒なるは佐幕派なりし彼の山科等幕府に對し言譯立ずと我が意に忤らひ私見を固執し腹切て死たりとて今更思へば何の益にも立ぬ真の犬死人の身の上の浮沈と世の成行變れば變る有様よと盃片手に額打背け少し愁然と打萎れて見えたるが綠竹に代る松の嵐何となく時雨れかけたる座敷の模様に早くも夫と心付きイヤてりや大切な祝ひの席で以ての外なる老の繰言又しても地金が出で年の加減と笑はれるが口惜しいドリヤ今一献祝いませうソレ皆の者注ざやれ〳〵と俄かに笑ひに紛らしつゝ四邊を見廻はし滿坐に向ひ年に一度の今日の祝宴には固より許した無禮講只今も申を勤功に依て第一の容分たる是なる渉を饗なすも爲めに何ぞ又變つた餘興がありさうなもの一同隱さぬ藝盡しを今一ときりと促し給へどハヤ歌舞音曲も數番に及びて隱し藝さへ出盡したれば今は我こそと坐を起上つて茶番一さし勤めんといふ者もなくサア〳〵誰かと推台ふのみにて席上少し打白けて見えたる折しも外面に聲ありて彈きつれ來たる二人の鳥追垣を繞りて姬松の引く手も繁き微妙の音色に節おもしろく奏でつゝ折戸の此方に立寄りぬ

新小說

一樹園殿には早くも夫と目を着けたまひ彼れは何ぞと問はるゝ下より前み出さる家從の下淵潜といふもの水の底にも眠るべき醉眼朦朧と鬚髭を撫廻しつゝも御前に伏して彼方を指さし彼れこそ新年の御祝儀まとて參上せし鳥追の女太夫幸ひ今日はお家第一の御祝日貧民御賑えしの御趣意にも叶ひまそれば彼等をお庭前へ呼入させまして鄙曲一曲奏でさせるもま取ての御一興と言上それば一樹園殿には醉痴れし下淵が様子見つゝも打笑み給ひさして否める氣色も見えず固より許した無禮講の今日の祝宴誰彼の厭ひはない大橋渉へ馳走の爲め餘興とならば何なりと呼入れよ卒疾く〳〵と思ひの外なる主公の言葉に末坐より起上りし一人の侍女庭前から折戸を開きて御前の召し此方へと誘へば籬の外面に幾度辭退を爭ふ二人の鳥追是非との言葉に今は辭みもなり難くて恐る〳〵飛石づたひに入來る御覧の通りの賤しきもの御前は况して憚りあり冠り物は此儘御免下さりませと態と笠をば脫がざれば分明には見え分かねど年の頃は廿一二ともなるべきう顏容並々ならず美しく色飽くまでも清らうなるが真紅の笠の緒に映ろひて一段の風情を添へ吳女蜀工の妬みを避けたる綿布の衣裝小褄輕げに打扮た

第二十四卷

るは譬へば飾りなき壁にも似ていよ〳〵氣高く並居る此方の綺羅錦繍却つてこれに氣壓されて見へたるが今一人は年稍老いてその母なども覺しきものと諸共に先づ庭先に手をつかへ遙か退つて坐に着きにける

下淵潜は見るよりもノサ〳〵と端近に坐を移してイヤ女共承れ今日は又なき當お屋敷のお祝日例年の御嘉例として御酒下さる、目出たいお席ぢや此の下淵が取持して召出された主君の御前その美しい口元で好いかシツカリと頼んだどやサア何なりと疾く〳〵と取持顔に勸められ鳥追の女太夫は面榮げにさし俯きて暫しは應へも出ざりしが良ありて耻かしさうに面を擡げ御所望に依りまして勤めますもお耻かしい鳥追風情のたしない游藝お耳に入れるは却て恐れと只管御辭退申せども御前の仰せは是非なしと引くにも引られぬ此場の仕儀お耳を汚を其段は濟まぬ事では御坐りますれど揃はぬ節もお笑草と何うぞお許し下さりませと三味線取つて引〆る調子の絲は狂はねど若しやと思ふ心には下亂れ行く三筋川棹の雫の泪を隱して祝ひの一節奏で濟ましつ軈て續けし一曲は相も替らぬ引歌とていと〳〵古き逢の山

君とまれとは花のはざまの緑障子はては浮名のたてつけに身をひそめても影やどす弓張月に糸かけて揺るや小きうの忍び音に聞かせまほしき前またり

と彈き濟しつゝ一禮なして涙を袖にぞ紛しけるヤンヤ〳〵とどよめく聲に酒席は再び活さかえり又酒〳〵と呼立てゝ暫しは鳴りも已ざりしが何思ひけん御隱居一樹園殿には女の唱歌聞終りて悽然と御氣色少しく例ならず何か俄かに物思はしき顔色となり給へるに側近く侍づき居たる侍女の誰彼は心得ぬお顔の御様子御機嫌如何にいらせられます何處ぞお惡う御坐いますかと右左より問かくれど一樹園殿には遠のに心付かれし様子にて面を擡げ笑ひに紛らしイヤ面白き女太夫とやらの合奏に一入興に入り食酔ました日頃過さぬ酒癖とて眩暈の致して堪難ければ我等は暫し奥に入り休息を致すであらう彼の庭前の女太夫は待合處へなりとも引下らして能う心附して取らすが好い渉を始め一坐への者へは今一際の饗應せよ好いか〳〵と言棄てゝ夫なり奥に入りたまへば跡は一際入亂れて歌よ拳よとさゞめき立ち誰憚らぬ遊興にハヤ燭臺の影華やかに滿坐に耀くも知らざりけり

●第十二

糸の調べに彈き上せた七日に近き弓張月かゝる門邊の下枝に梅の香ならでうろ〱と何を慕ふて訪ひ依るにや行きつ戻りつ一人の巡査此の別莊をさし覗きて何か心に頷きつゝ今日ハ恰かも一月四日何處も同じ年始の酒に新禧を祝する歌三味線あるが中にも當邸にてハ分けて由緒ある祝日とて多くの客さへ呼集ひつゝ世に憚りもなき晝夜の盛宴今を盛りと見えたるが夫ゟ引換へ我等の身の上と四邊を見廻し悵然と立やすらひての獨語、その砌り父上御横死なされしも丁度一月四日の夜人傳手に賜はつた御遺書に依て事の次第を概略承知し斯る譯にてありしかと無念骨髓に徹れども更に詮方なく夫ゟ以来御遺志を承繼ぎ我が面目を起せし上家名の汚れを雪がんと東西各地ゟ流寓し出世の門戸を求むれども思ふに任せぬ世の習ひ一旦朝命に反對し賊臣の名を得たる我等とて頼み寄るべき朋友さへも皆な散り〱に四方に散じ仕官の願ひ達せんにも媒介すべき人ハ無し是非もなく〱日ハ一日と不幸の衢にさすらひて抱く素志さへ錆刀の磨ぐ由もなき心の雲霧切端詰めたる身の貧に巡査とまでも成下り一時を凌ぐ活

計も又一ツにハ父上の御遺志の片端打果さん爲めにも成らんかと言甲斐もなき心の言譯と又もや四邊を見廻しつゝ小謡の聲に耳欹て、あれ彼れハ慥かに此邸内の酒宴の席終南山の麓に棲むとその進士にハあらねども仄かに噂に聞及んだ屋敷に仇なす不法な奴等蔭ながら心を着け守護し参らせんとの我精神に少しも變りハ無けれども何を言ふにも今ハハヤ目通りさへも叶はぬ我等側近く拝謁して事情を告げん様もなし幸ひ署長の慈悲に依り當方面の分署詰となりしを幸ひ日毎夜毎に心を配り夫となく屋敷の様子を窺ふ處ゟ此両三四日以前の夜より何か怪しき一人の男此邸外ゟうろつき居るハ窃盗などの窺ふにや何れゟしても用心惡し斯る事とも知らずして酒に亂れし屋敷の様子さて〱浮世様々ぢやハイヤてりや大分更けをつたにと立去らんとする折しもあれ此方の梅の片枝を力になしてする〱と垣を乗越え飛下れる怪しの男手拭眉深に面を包みてさす月光を厭ふが如く身を垣側に忍ばせつゝも足遽ふ行過ぎんとなす其様子夫と見るより巡査ハ早くも馳近づき何者なるぞと言ひつゝも腕を執つて引戻を思ひも寄らぬ一聲に南無三寶と吃驚せしが捕へられてハ身の一大事と威しの短刀閃めかし

緩む途端に手を振解きて又一散に馳出すハヤ宵月夜の影傾きて四邊ハ暗き竹垣板塀折曲りたる物蔭に姿ハ軈て失ひしが勝手知りたる土地柄とて逃ぐるも追ふも心の矢竹藪に添ふたる一筋路を尚ほ何處までもと追掛け行きたり

●第十三

表の廣室ハ唄よ舞よとざゝめき立て騒がしけれど此ハ遙かに奥まりたる書齋の裡に御隠居一樹園殿ハ酒に食醉ひたりとハ當座の詐り深く心に驚きつゝ不審に堪へざる事ありて態と一室に閉籠り獨りつく〳〵と思案に沈みアヽその様子さへ怪しきにその動作さへ貴やかなるに彈く唱歌まで只ならぬ聞へしハ全く斯く思ふ此方の心の咎むるなるか何にしても合點行かぬ若しや夫にハあらざるか若し夫ならば何として引留め置かん多くの人ハ集り居れと今宵祝宴に打集ひたる本邸の家從の族ハ何れも〳〵心置かるゝ人々のみなり滅太なとを言出ば卻て何かの障りとならんトハ言ひ此儘打捨置きてハ何時又渠が所在を知りて渠が不幸を救ふて得させる時あるべきや此ハ難儀なる事起れりと只管深き思ひに沈めば兎角時刻移りて過せし酒さへケソリと醒めハて凄然と火光寒き短檠に對して影相吊ふのみ形相憐れむのみ方幾尺かの書齋の裡たゞ馥郁たる盆梅の香りのみに鎖されけるが折しも前栽を隔てたる文庫の彼方にあたりて何か怪しき物音聞ゆ松の嵐に嘯く聲か宿禽の月に驚くなるか夫かあらぬかと起上りて何心なく障

子を推開け窺ひ見れバ月ハ敢果なく影傾きて夜目にハ夫と定かならねど木の間を洩れて奥庭の彼方より遙かにちらめく火光に照されウソ〳〵と忍び出るハ紛ふ方なき人影なり

一樹園殿にハキツト目を着け獨り窃かに心の中に案ずる様ハ人目多かる市中と違ひ兇用物騷なる此邊あたり只さへあるに況して本邸の家政に付てハ種々心得ぬ噂も耳に入る此頃の事油斷ハならじと早くもソコに心付き軈忽ち大聲を發してヤオレ怪しき曲者ありて今しも庭内に忍び入りたるぞ誰かある疾く出會ひて捕へよや疾く〳〵と五聲ばかりも呼立らさしに夫と聞付けたる奥の廣室に群れ居る者ハ右往左往の騷動にてソレ賊なるぞ〳〵と只聲々に呼ハり騷げどハヤ十二分に醉痴れて足もしどろに目も怪しく捕るべき賊ハ内か外面かその居り處さへ少しも知れずイヤ物共うろたへるなその曲者ハ庭外なるぞ先づ靜かにせずや〳〵とハヤ一樹園殿ハ其場に再び出で給へるに人々慌ふためきて醉ひたるながら禮を正し倒れぬ許りに末席に俯き坐せバ折しも庭口より家從の下淵彼が年若き女太夫を高手小手に縛らぬ許りに捏上げて蹤めき〳〵入り來りウヌ盗人不屆奴なり下に居らうとぞ引据ゑける

餘りの事に一同ハ興を醒し如何なる譯で此の賤の女が不屆き盗人さてハ女と詐りて惡事を働らく痴漢なるか但し又女太夫と見せ掛けつ、日ごろ強盗大賊の手引なども奴なるか何にしても合點行かずと人々眉を顰むる中にも主公一樹園殿にハ取分け呆れし面色にて徐々と歩みを前め端近に坐を占められしがツクヅクと二人の樣子を見据ゑさまひコレ夫なる女何故あつて恣まゝに奥庭に忍び入り居室近く立寄たるぞ仔細ぞあらん包まず申せと問ひ給へば女ハおろ〳〵涙を拂ひて咽せかへり〳〵餘りと申せばお情ない下淵さんとやらの仰しやりやう御酒機嫌かハ存じませんが今お待合處に引下つて休んで居た妾を執らへ無体なとを仰しやるまゝに何うせ御酒の上で仰しやる事と好い加減にお相手になつて居れば夫を何とか思召してか身に覺えもない只今のお言葉とりや御無体で御坐いますと其儘其處に泣入たり一樹園殿にハきこそと再び下淵潜が振舞に呆れし体にて只悵然と打守り暫しハ言葉も出ざれば斯くと聞くより下淵ハいとゞ面を眞赤になしてうち腹立ちウヌ女め何とぬかすぞ彼れほどお庭前に忍び入て怪しい

擧動に及んでゐながら無体を言ふも能く出来た此の下淵が何用あつて乞食風情に何と申した證據の無いのを好い事に盗人たけ〳〵しいとハ手前の事だ手前の素性の怪しいとハ縁も由縁もない此お屋敷にお暇の出た身をもつて今時分まで馬子付て居るのが何よりの證據だサア今一言ぬかして見よ直と巡査に引渡して素性を糺さにや置かないぞと髭逆立て、息まき散らす何れを夫しも見極め難きに一同面を見合せたるが素性を糺すの一言にギツクリとせし下なる女斯くと見て取る一樹園殿愈々それと察せし体にて此ハ如何して好からんかと互ひに包む胸の當惑人に知られぬ心の暗涙おし隱しつゝ悶ゆる折しも一人の曲者引立て、庭口より又もや此へ入来れる一人の巡査チトお尋ねの次第がありますと芝折戸近く進み寄りぬ

●第十四

女が嫌疑の爭ひ最中曲者の本人ありて將て来れりと巡査の案内に一樹園殿にハキツと目を着け苦しうない〳〵其儘これへと呼入れ給ふに巡査ハ何か面榮ゆげにも帽子を脱ぎて恭しく一禮なし今しも御門前巡行の折柄思ひも依らず御邸内

より忍び出し、此れなる賊怪しき奴と引捕へて召伴れ參れバ尚も仲間の賊などあるにや御邸内にて召捕れしものありとて洩れ聞ゆる詮議の高聲臺聽行かずと取敢へず推參致したのでありますが此賊の仲間もあらバ尚以て捨置難しその本人ハ何れなるか速かにお渡し下されと言葉忙しく陳了れバ其處に立ちたる下淵潛ハ只呆氣に取れて暫くハ惘然と答もなし様子見かねて末席に控たる大橋渉恐る〳〵前み出でイヤ邸内にて捕へし賊とハ全く事の間違ふて忍び入たる曲者ハ即ち夫なる一人のみ疾く〳〵本署へ御引致ありて然るべく御詮議あれ尚關係にてお尋ねの儀もあらバ何時なりとも家從を差出し御尋問に應ずべしと打消す様に言放てバ引立られて来れる賊ハ恨めしげに大橋が面を打守りをり大橋ハ尚もねない早く下がつて立去りをれ御前にも最早お入りが宜しう御座いませと言葉急しく陳終れバ一樹園殿にハ何か暫く思案の体黙然と眼を閉ぢて更に答へもなかりしが良ありて頭を擡げたまひイヤ夫なる女暫らく待て忠誠無二の下淵潛が斯くまで申す辨解にヨモヤ相違ありとハ思ハれず其を彼此と爭ふハ却て手前が

適口上是なる男と同腹の間なるや何故あつて庭内に忍び入つたぞ其譯明白に言ふて聞かせよコレ夫なる男其方も面と擧げへ此女ヨモヤ見知らぬとハあるまいと言ハれて恐る〳〵面を擧げしが顔見合せて互いに吃驚ヤ、お前ハ慥ゝに善太さん、さういふお前ハお蝶どの何うして此處で、と驚く体を巡査ハ早くも見て取つてそりや其方ハと是も又思ハず見交す顔と顔女ハヤ、と身と仰反らして貴方ハ慥かに左太郎様アノ山科の若旦那といふに一同再び吃驚エ、と計りに顔見合せきハ左太郎ハ恭しく容を改め一樹園殿に一禮して斯く姓名を知られし上ハ今ハ何をか包み申さん私しことハお聞きの通り御旧藩士山科左太夫の悴ふ左太郎と申すもの仔細あつて出京の後身貧に迫り當方面の警察分署に奉職せしも窃かに聞及んざ御邸の御内情傍觀し難きとあつて蔭ながら御守護申して居さ所今宵測らず當御別邸のお塀を乘越ゑ一人の曲者合點行かずと引捕へて段々仔細を糺して見ると譯ハ言ハねど懐中より取落した是なる手紙かねて申せし一條ハ今日の新年宴會を時として其の雜沓に取紛れ窃かに彼處に忍ぶ様又此の手紙ハ賞金引換へに必ず此方へ戻せ様とあら〳〵ながらも認めたる手跡ハ誰かお見覺へが

御座いませう御幼君を侮つて惡事を目論む憎くき奴等此儘にハなりませぬ今までで夫とハ氣も付かず只尋常の曲者とのみ心得て斯く引立て參つた處樣子を聞けバ手前ハ成程横堀善太日ごろ此方の大橋渉と主從の關係さへあるからハ己もドウせ深い仔細のある中だらう既に証據の擧つた上ハお家の大事、亡父の怨み況して此方の職務上今ハ根本を洗ハずには置かれぬサア先手前から白狀しろと襟髮取つて引起すに善太ハハツと氣も魂も蛻の殼轄しハ呆れて呆然と目を睜るのみ言葉もなくて居たりしが良くにして大息を吐き折も折なら人も人こゝで再び出會さうとハ夢の夢にも知らなかつた日外や鳥羽の戰爭あげくに八幡の社の暗紛れお蝶が親を手に懸けてマンマと爲しめた百兩包跡で噂に樣子を聞けバ奪た金ハお蝶の路用手前の親爺が紀念に呉れた泪金とハ慥かに知つたが其の左太夫奴を暗撃して殺し損ねた以前の怨み又七兵衛がその時の最後に付てハ小女郎ながら娘のお蝶言合ハさねど二人して附狙つて居るとか人の噂に此奴見付られくハ面倒ならんと高飛して遙々と東京稼ぎせハ御維新と改まつても改まらんのハ此方の惡心今までハ種々な惡事も仕盡したが頼まれた其手紙を取らきさ上ハド

ウセ此方の運の盡サア旦那イヤ大橋下淵の兩隊長モウ大概に見切を付けて奇麗に言つてお仕舞ひなせへ迚も遁がれぬ厄年だぜと手拭取て坐になほるに大橋下淵の兩人は夫と聞くよりギヨツとなせしが今は早是迄なりと覺期やしけん兩人は端近に座直りつゝ恐れ入つて平伏そ中にも大橋は暫ありて頭を擡げ上を欺き私慾を謀れる不忠非道の私共の擧動今宵竊かに善太を語らひ當御別邸へ忍ばせたるはかねてお手許にお備付けの御記錄類を奪はせて日ごろ一同がたくらみ置ける御財産横奪の跡を晦ませ鬼も角も計れんと心を籠めた甲斐もなく事斯く露見に及べる上は今は包むもその詮なしア、恐るべし〳〵天道の明かなると斯くの通り何を隱さう是なる女は渉若年の砌フトせし心得違ひから召使の侍女が腹に宿せし一人の女子人知れず暇を與へて苦しき別れを遂げたる後妣なる女は產後の病死云々の手續にて今は伏見の土人形師七兵衛が養女と人の噂に聞くに付け愛と慾との二筋道主公お鷹野の砌を幸ひ御心を蕩かして竊かに御殿へ伴込んと謀りしも種々密計のあるとなりしに敵黨山科左太夫等の爲めに裡をゑゝれ夫より後はお蝶が行方少しも知れず老いて一家の跡目も無き渉が身には一

入戀しく生死如何にと常日ごろ案じぬ日とては非ざりしに今宵たま〳〵我等の連累横堀善太が捕縛に依て惡事露見の其際に再會したるも一ツの不思議こりや能く〳〵遁れぬ業因といふものならんと目を瞬きてさし俯けばエ、そりや貴方は私しのとお蝶は覺へず膝すり寄せたり

●第十五

思ひも依らざる大橋が懺悔の一言夢かと思へば生憎に夢ならぬ淺間しさにはお蝶はワツと苦しき泪その父上が何故に此お邸へこの惡事また假初にも大恩ある山科樣を彼のお始末左太郎樣は我子の何戀慕ふ人とは御存知ないか餘りと思へばお情ない聞へませぬと身を起し掻口說かんとあせきどん泪は生憎袖にひたひた彼方を見上げ此方を見上げ只生体もなく取亂せば折しも再びドヤ〳〵と折戸を開きて入來る警官サア山科氏お早くなされ、急訴に依て事情は知つた、疾く〳〵一同を引立めされ、サアお早くと右左より促立られ引くにも引れぬ是非なき場合左太郎は氣を取直して突起上れば我舅我讐大橋はハヤ高手小手なる繩目の下お蝶は下に瀧なる泪見送るも見らへるも只哀別離苦の闇から闇恩愛の絆

てゝにフツリと斷れて無常迅速夫なりけりとは——色もなさず香もなさぬ今の花扇が身の成果——ア、今の花扇が身の成果——

當冊子改良の事あり中ごろ卒かに取片付ねばならぬとゝなりるふ付不始末ながら本稿は先づ是れで結局となせ

おのれは性質ての暑さ嫌ひにて每年暑中は半病人もちまへの腦痛に筆とることもの苦しければ水と石の小說も尻切蜻蜓に結局をつけホツと一息つくゐに頰杖江戸新聞社と同好會へ暑中休暇の願ひを出し凉しい土地で命の洗濯磯部にしやうか大磯かと思案なかばへ頼みマシヨへイ何方からと出て見れば同好會からの專使森田須藤の兩先生から十五號にも何ぅ記けと言合せた樣の同文のお手翰お勸めならば舊稿でも虫曝がてらふ出しませうが又那奴めがくだらぬ事をと讀者諸君のお叱言は聲價に拘はる一大事件とお爲ごかしの分疏も聽許られぬ義理づめ母取出したる古物語は小說ならぬ實事談筋も趣向もなみ製にて世間に往々ある顚倒ごと生母をば諌めかねて娘が自殺の顚末を物語体に綴つさら斯もあらふかとの獨合點短文だけに御辛抱をと申し譯やら前文やら汗もろともにうくの如し

淡路島

香雪散人

通ふ千鳥の啼聲にといふしへ人のよみしあたりの事なれば寐覺のすさびにはな

ど催さるゝを辭みもあへぬは例の聽き棄てがたき心癖にて斯る人知れぬ沖の石のかくろへ事を海士の刈藻のえづらしともて騷がむは罪得がましうなど遉に思はぬにしもあらねど猶忍びあへぬは人の物言ひさがなき世の慣習にこそ津名の郡三原の郡などいへる邊は舊くは阿波のかうの殿の領知賜へる地にて千代田の稲田の何某が久しく管理處辨したるよしに聞けばかうの殿の家臣の中にも何某を私の主とたのむ人も多かれば是もさる分際の列にやあらん坂の上の何某といふ有りし内膳の村に家居廣う住みなして萬めやすく世を送りしが主は早く世を去りて今は母娘只兩人のみぞ殘れる若木の柞のみぞ枝麗しう見どころあるに撫子のや、時知りがほにうらうたく婀娜めきたる先何れをかなど忍びて心懸るもあり卒爾にいひ寄る輩もあれど捗々敷は應もせぬと斯う塵をさへ据ゑともてあしづくは誰が床夏の花となるにやと覺束なく思ひ煩ふもあり中原の鹿はあれ誰が矢さきにか落ちんと腕摩りつゝ歟くもあるべしかゝりし間に如何なる縁由ありてか此處よりは程遠からぬ廣石といふあたりより此娘の許に來かよふ人出來て忍びてうたらふに是と定まる後見といふも無く物心細き際なれば許して

娶せたる後はえや心に懸る限もなし剃髮して世そあれたる山里には這隱れぞとも亡夫の後世追善の外は露ばかりも世にかゝづらふべき身ならずとは自分もいひ人も思へるに生憎なるすき心に却りて目さむるばかりはしたなき事の漏聞ゆるぞいとも〳〵罪深きわざなるさるは苔の下にも奈何思ふらんなど影護からぬにしも有らねど若き人のいと睦しう春の夜の夢ばかりなるを慨ちいづらは秋のなど恨むを仄聞くたびに在りし世の事さへ思出されて我にもあらで袖うち濡すは遉に憐れと怨さるゝ方もあらめど今は強りに強りて嫉妬さのみうち添ひつゝ我娘さも思ひたらぬ体に罵りはしたなめなどする事もあり深更下におりなどして歸る際も遣戸荒らかに押開け驚かし或は此の燈の暗きは油や注忘れたるなど獨ごちつゝ軈て差覗くめる奈何は此方につらくも愧かしくも心苦しくは思はざらんや情深う思ひ遣りこよなきは老の常とて目ざとう咳き勝なるをさへ忍びて物するに斯ることそいとさがなくもはしたなき所爲なれ去年の夏の比とか宵の程より癪氣の張く發りて惱ましきにとて娘して抑へさせしに夜漸ふけ渡りて眠たげなる面もちの見えしと甚いたう腹立てさは死ねとの事にやなどむづかるを此

方に聽く聟の君の心の裡も奈何苦しかりけん物蔭より近づき來て承まはりぬ爭できる事の侍るべき快癒らせ賜はずは猶よく仕うまりてよ御水は麻呂とりて參らん、などいふを枕もたげて聽きさしつゝ、此人の斷情なきに引かへ殊更にとひ賜へる事の嬉しさよ侍婢達が口ずさむ鄙謡にも嘖に嬉しきは男の力とこそ聽きまれたり侍るなれ無禮にはあれど代りて抑せ賜はゞ斷ぬべき玉の緒もいかでか繋ぎ留め侍らざらんいざ疾く、といふ聲は苦しげに息の下なれど娘が耳には却りて鳴神よりもおどろ〳〵しう堪難きばかりなるべし言る、儘に退り出て閨へは入れど生憎に目もあはず只行末いかにと思ふに胸のみつと塞りて涙せきあへず明るもえや程なからんに紛るゝ事もやと硯引寄せつゝ、手習ひのやうに「

立おほふ柞の露のしげゝればさうでや朽ちん撫子の花」とかきもあへず潜然となくを彼方にも今は絶入ぬべしなど仄聞ゆるは未惱み賜ふにやとは驚かれながら立もえした居るもえしたまて心ひとつに躊躇はるゝもいと哀れなり」

昨日今日簷前の萩のそよぎも只ならず物悲しげなるは秋になりぬるなるべし螢の影は稍稀になりもて行けど言ぬ思ひの消難ういとゞ燃まされる苦しさは思遣るさへ胸痛き迄なり今日は亡夫の御墓參とて朝とく立出られしが殘る暑さの堪難ければ終日彼の寺にありて入相の鐘の聲きく比ならではえ歸るまじきに迎の車も其心して物し賜へ早きも心遽だしうつらけれど然とて遲からんも路の程たど〳〵しう怖ろしかるべしなど、言ひ掟て又立かへり、我なき心緩びに午睡などな仕賜ひそ鬼の留守の何とやらん打戲れ過してそしたなく猥なる事な仕賜ひそ御讀經の際進らすべき布施燒香の類も一緒に集へて包入れ賜ひしか、など罵りつゝ急ぎ乘りながら扇や忘れつるとかい探り取出しつゝ、えら〳〵と遣ひゝ、斯萬の事を厭はしき迄にいふにつけては在らずも哉ともおぼすめれど若き人々にのみ放任てなのめならん謗は誰が上に懸るにも侍らずかし内に憎まれ厭はるゝは扨も有なん疎き邊に輕々しく言れんが遺憾なればとく繰返しては聞えさするなり兔にも角にも免れ難き種々の羈絆の纏るは出離れまくき火宅の苦艱なるべしあな暑や〳〵車とく遣れ、とそのゝしり出ぬる後は宛然野分のなごりめきて脱棄つる浴衣は秋の千種のおしたゝなはれて折術もなく覺え檜垣染たる帯の解ひろげさるも崩れ倒れたる体して甚狼籍しきを漸収めなどせる程聟の君の遽

だしう出んとするをやをら引駐めて、彼山寺の松の風は身にしむべかりにも思をめれど心静なれば身も涼しとか聞くを、など怨ぞれば、否因よりみ寺などへとは思ひも懸ずはやく學問の朋友なりし何某許訪問れんと思ひしなれど往ざらんも何か苦しかるべき、とて團扇手まさぐりつゝ、端の方に座ふを正面にも見あへぞ羅綺の袖うち蔽ひつゝ、少し居よりて言んとしてはむせ返る体の甚憐れなるになどてさは歎き賜ふぞ常にみこゝろに違ふ事の多くてえも言難き憂きふしの折折まじれるは此方にもさこそ恨み賜ふらんと推量ながら若潔うもく放れて返しの風の暴ましくはなど思ひのどめて有ると自分の好色心に斯なんと見賜はゞいとつらうなん然ども今霎時忍耐賜へ道ならぬ迷ひの雲の何時迄か立籠て侍るべき遠く晴のかん程も近ぅるべきになど告しおにか死くどくを聽も敢ぞ、今日迄の憂さみだみ堪たれぞ其は扨も有なん只世間の人語の騒がしうかしこき邊に迄もく傳へて宜うせずは長き契とたのめしも末遂難くやなど思續くれば如何は悲しからぬ返しの風は暴くとも距絶させ賜はゞ忍耐ぶ力も添ぬべきに其心御弱さこそ先いと苦しけれ小糠何とかいへる俚言も折ふこそよれなど繰返せばさのみ

はとて」

風厭ふこ萩がもとの葛かづら引くをはいかゞうらみ果べき」といへは涙ながらに

葛かつらたえなむたえよ厭ふとも盛まつべきこ萩ならねば」

御堂は南面にて西東にわかれて廣う建列ねたる西の方は僧房なるべし東二堂はかりには御佛數軀たゝせ賜へるが其が末より北ざまにうち橋長う架設したるは然るべき人々の参詣賜ふ時假に憩はせ賜ふ料にて常はおろし籠たるを今日しもなごり無く開渡して伊豫簾涼しげに懸たる與の方には眩きばかりなる屏風をたて端つ方に閼伽棚めくもの据て水注に金椀取添へ白き手拭を置るなどゆゑしきけは無れど場所がらいと清げなり庭は松樅むろの木柘植など圓らかに作なしたるが許多植列べたるに苔深き立石の嚴しう据たれたるなど尋常には体異なるもとかし御讀經も果ぬるにや此處に先導したる聖は折ふしの堪難き暑さにつけて清涼淨土に無熱池といふがある事より蓮の花のえならず愛たきがある事音樂の名は想夫憐といへるも實は殊なる蓮の花の名あるを音の近き儘に稱換たるよし

或書に見え侍りしかそは漢土の種にこそあれ彼處のは其類にも遙に優るとこそ覺え侍るなど說聞ゆるを此方には其想夫なといふこそ却てゆかしけれど思ふなるべし此聖そて心は花なとも言ぬ体なれ若き法師達或は法弟ともなくて物學びがてらに止宿る壮士輩など密にさし覗もあるは此處にも浮たる聞えの限なけれむなるべし早う此聖に仕へて今は御寺の公け私し何くれの事とも執なさねて人の用ひも淺からぬが豫て思ふよしや有けん肴一種二種と瓶子取添へつゝ持出て忌せ賜はぞは、など切に勸むるに、猿に似るといえれんは如何は遺憾からぬ少しは用ひ賜へなど亡夫のいさめし儘にいつしかならされ侍りて全く厭ふとには侍らねど日がらと言ひ場所がらといひ愼むべき時にこそ、とて打解ぬ顏なるを、御肴に何好みむと其方に深う心しらひも仕侍らねど御墓參詣も果させ賜へは今はおち賜ふとも怪しうは侍らじをなどいふに此方は只打笑むのみ固より好む筋なるを何かは何時迄も忍果へき一盃二盃と算ふれは伊豫の湯なためゝどつゝましげなりしけはひも餘波なくそゝぎ流されて互に隔立なく汲かはす程汗衫すべしたる肌膚のいと清う數寄屋縮の表着に見え透たるいと艷にて少し年長すぎたる

も恕さるべき体なれは頃日思ひ渡れる何某も甲斐あるさまに見やりたるが移易き性質には彼うら若きよりも此法げづきたるが棄難くゆかしう思ひ做さるゝは怪しき迄にて、後の世の苦艱よりも先現世の憂さを救ひ賜へや、なと甘えてうち出たるには奈何なる石木の佛たちもなどかは救せ賜はざらんやとは誰見聞よりう世に漏れけん只茅蜩の聲ばかりして此室の戸には風より外に音づるゝものも無りしとか」

御寺の聖は道德いと高う世の覺えも尋常ならぬに彼室の戸の風のまに〳〵怪しき事ども仄聞ゆるを爭で疎漫に聽過し賜はん然りとて明瞭に糺し問れんも遉に耳立て穩しからじなど思ひめぐらされけむ只何氣なき体にて何某に身の暇を賜ぴけりとか幼き程より仕へ馴たる始終を思ひつゞけそゝなき假の契に後世までも頼みある境を放れてやもめ烏とあやしき中宇に彷徨えんはつらくも悲しくも打歎かるべきにたのむの雁の落る方見定めたる心ちしてなか〳〵に心易げに退院しこそ甚愚なる所爲なれ世の聞え人の思はんとにも心留めねば娘が上聟の君などには何かはつゝましとも憚らん常住たる傍れ一室掃ひ開させ調度ども有

るべき体裁にしつらはせつ、迎入れたる娘の心には外聞惡ういと目ざましき限なから傍は我しめの内の花の心も靜穩になり他方に芳香をゑくる影護さの薄らぎぬべきが頼もしき心ちしてさのみは物憂く隔果つる々はひも見えぬに彼花の心の怪しう尚老その森に立交らまれしき体なるぞ甚うたてく心苦しき世のさまなりける如何なる折にか有けん津の國阿波の國などの地圖の其方には必ず侍るべきを暫時が程貸させ給へと侍婢して言ひれこせさる出し遣るとて其が間に人知れずかい挾みたるを何心なく引ひろげて見れば詞はなくて」

　柞葉のこゝろの色や移るらん隔果てさるむこの山風」と怪しう書をさびたれどつぶ〳〵と放ち書たるは紛るべくもあらぬ男手なれば、されは我より先にきる事の有しにやと何某が甚妬う腹だつ心に取隱しもせで、斯る物こそ侍りけれなど然る事の侍るべき隔果てたる体に放棄きてものし賜へ、など道に正面には見もやらずそ知らぬさまに引拔きて、岡崎堂島のあたりより徳嶋へは思ひしよりも遙にこそ怖ろしき處と聞渡りし鳴戸をよぎては往く方もあらぬにや、など獨言つを此方は耳にも留めずやをら硯引き寄つ、此おはひたる紙に」

　むこの山いかで分々見んやしろに履みかよふ路乃絶えぬ限りは」いとあらぬに不束ながら斯くぞ今を限とかなたにも思ひなりぬべき生うかびにて中宇に迷はせんは罪深きのみか如何は此方にも頼もしからず覺束なさ心ちせざらんや、それ見終賜はゞ是添へて疾返し參らせんをなど催をにさして心苦しき氣の見えぬは實に心の色の移ろひ果ぬるなるべし此返し見たる人のこゝち如何ばかりもしたなく口惜からざらん是が爲にはよしなく人の歎きをも添へしに斯放棄れられたる身は繋がぬ船のこゝちして寄るべき港のさし定れるさへ我から引違へ心易からず終に妻にも告知らせず廣石なる家に遠隱れたれば娘は恨めしう斯はかなき末を見果るも誰がわざぞと明瞭にはいひも得ず獨打しほたれて籠居るを問慰むる人だに無き心の裡奈何つらう悲しからん思ひ遣るだにいといたう胸痛きこゝちぞする八代の履通といふは何某が御寺にありし程の名なりとか」

人の物いひさがなきは免るまじき世の慣習にて寸を尺にすとかいへるに況て斯目ざましき擧動のみ多かれば誰かは聞傳へ語繼ぎて怪しう珍しき例に言騒がざ

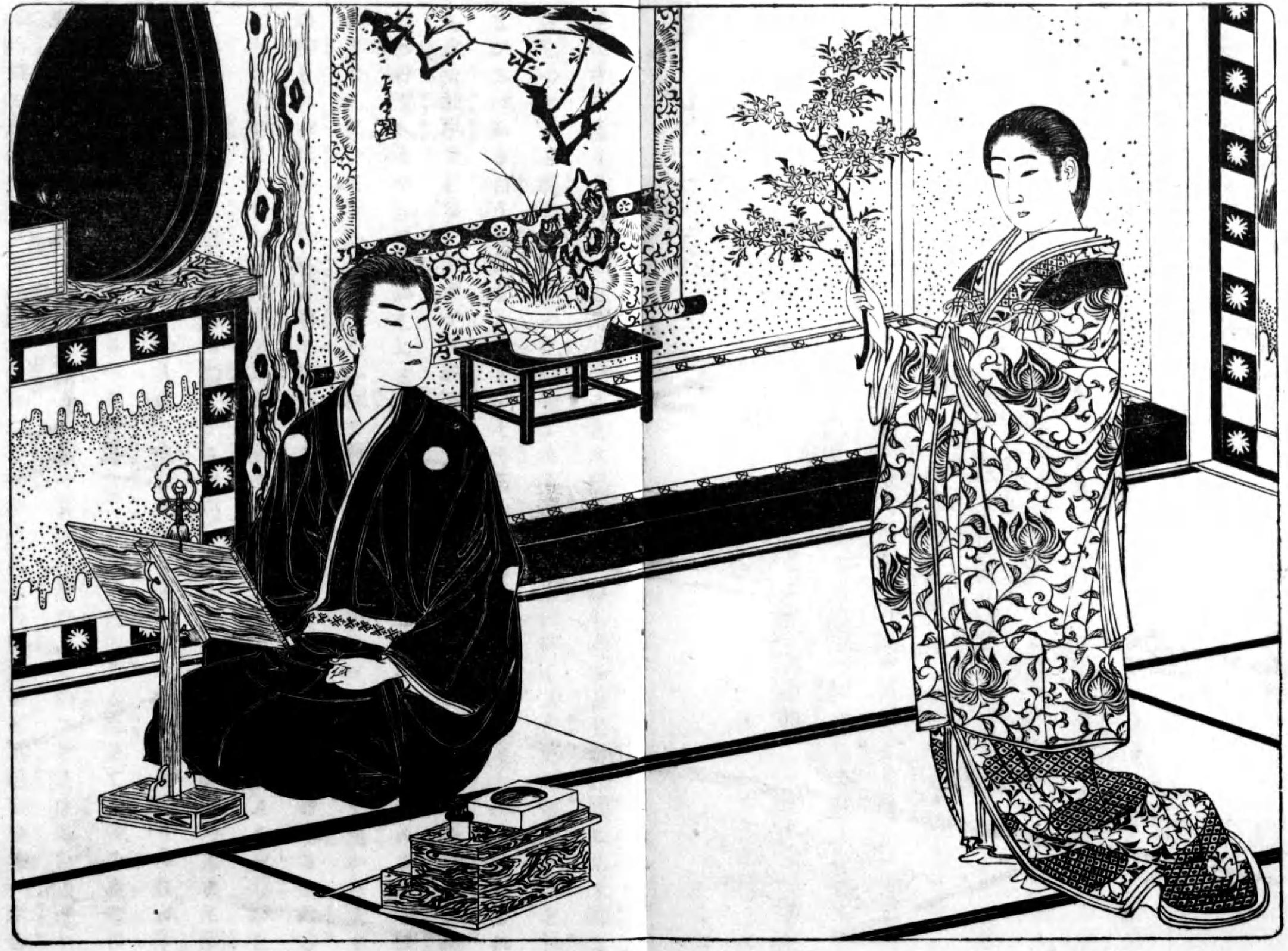
らん聞けばよどのになど口吟しも今は昔にて鬼子母とか淺ましう怖ろしげなる名に呼るゝも子を取るといへる謎にやあらん大槪の世の嘲り謗りは心にも懸ぬ性質なれど遉に影護う得堪ねばありなりけん彼相思ふ人と談合ひてある宵闇の紛きにそこれかとなく迷ひ出ぬ娘は晝の間より頭惱ましとて籠居たれば毫知らず日高くなりて侍婢ら周章惑ひつゝ斯と告るに如何は胸潰れて驚かさらん、今日迄だに憂には堪てあり歷しを何の憚るを心苦しき事の在しまして斯思懸ぬおん擧動のありしにや此身を疎み賜ふとのいと深う母とな見ろと迄に思しなりて行隱れ賜ふとならば我こそ先にともうもなりぬべかりしを難面く遺留めて遁れ賜ひしも心の裡こそいと悲しけれとて絶入ぬべく泣くも道理なり斯る事ありと聞傳へたる親戚一同皆集ひ來て、松穗の岬あたりより明石の方へや渡り賜ひし先彼方をと、いふも有り、洲本より由良のかたには故どのゝ御緣故も侍るよし豫て聽置きて侍れば其方の空にもや、といふも有れど實とうべなふもありあらじと爭ふも有るがなかに安倍の何某も心きゝたるが膝おし進めて、近來のれはいと疎遠くのみ物したれば斯思迫られたる原因はたどり知るべき際ならね

ど扨も猶かたそら痛ぎてしたなき事の折々聞ゆれば今は耳敏川の淵にも瀨にも限なくこそ侍らめ然る事の遉に心苦しくて斯なりぬるならば何どて近傍に彷徨るべき必ぞ知らぬ境に世をうしろ安う送らんの心構へなるべし然りとて明石潟より浪華の浦にとも思ひ寄らねどおのれは猶阿波の方角ぞ賴みなる彼方には得さるまじき事の侍れば折に觸れ時につけを搜索侍るべし、といふに集へる限り、實さりけり此一件の事は貴君にこそ委任せ參らせめ、とて各歸れば何某は、心細くとも霎時しのび賜へかし斯云はゞいと淺らかにも思すめれど世の聞えの恥かしうつゝましきも斯有ぬ先にこそ厭ひも包みもせめ今は其甲斐なくなりにたれば只心廣く思ひのどめて深くな歎き賜ひそ最初の契遂ず離緣ぬるとなども知る人は能知りてぞ侍るべきなべての風說にも娘はいかに悲しかるらん如何なる前世の因緣ありて斯憂きことのみさし集ふにやなど推量り憐れがる人多かるよしは翁も常に聽きたりつれば其度ごとに推てや訪問れん強て諫めんと思はぬにしもあらねど距絕て、いと痛く嫌ひ賜ふを知るからに心ならずも打過ぐして斯なれる事の遺憾さよされど何時迄か斯てあるべき今を昔に語り出て

慰む時のなどか無らん、なと細々と力づけ物語るを聽くも只涙より外なき」かゝる時無くてぞあだになりぬべき殘る巣守にたぐふうき身は」といひもあへず潸然と泣く、如何ばかり情なき親鳥なりともなどか此儘になり果ぬべき、待ぬ雁さへぞや音づる、ものを、など慰めつゝ、日に添へ夜寒になりぬべきに心しく明し暮し賜へや斯人少なゝる折は門なども疾閉せて、などいと忠誠やかに心づけて歸れるは道に親戚中も特別てたのもしき人なるべし暮果てより本枯吹きあれてそこそかとなく木の葉の散亂るゝにつくづくもいとゞ涙とゞめがたう打歎かるゝと傍は寂しう物怖しきに夢さへも結びあへぬは彼草枕にもまして心細かるべし」

家を出づといふとは早う聞ならびたる身も空行く雲流るゝ水の類に定めなくれこなひ歩く上にこそあれ樹下に宿りては枝をつらぬる契りをこめ石上に寐ては堅く行末を誓ふなかには牛の車の無りせばとは言ふべくもあらずなど男は道に思はぬにしもあらねど深山の奥のわび住もなど此方に口吟むを聽けば憂もうからぞとの心なるべし日を歷て徳島に到着きてある怪しの家もせめく移住めるを彼搜索にとて立出ちたる安倍の何某は奈何して聞出しけん忍びて窺ふに紛るべくもあらねば或夜先づ遁るまじき心しらひしてつと入來つゝ、此比麻呂も得さくまじき事の侍りて思立侍りしに知人ありて此處に在します由申したれぞ思懸けぞ歸るさの賑はしうなれる悦びをも聞え故鄕の空には何時ばかりにか思し立せ賜ふらん其概略も承まはらまほしう心にかけながら今日迄怠りつる罪さり所なきなど事も無げには言紛らはすものから此方には如何に心苦しう恥かしからざらん霎時は引入りて語もなくかいひそまれしが、故殿の追善法會などにかゝづらひてをり〳〵御寺に參詣侍りしを世の風說の喧しうあらぬ事など言騷ぐれさがなき慣習とも思ひなさめど家なる人さへ同じ樣に思做をがいとつらくて終に斯遠隱るゝ事となり侍りしを憐れともればせかしされば再び故鄕にとも思ひよらねば何時を限とか聞えさすべき只斯ながら朽果てぬべき身にこそ、など慨言がましくいゐを、言よくな言ひ紛らはし賜ひそ、などは言はで、實世の人の口さがなさばかりかたはら痛うつらく苦しきはあらざりけり都て毫ばかりも證跡無き事をさへ言ひ騷ぐが常にて侍るものを況て御寺詣での蹟あるからは然る事

もいふなるへしよし言ば神社詣でとしも言ふべきも、など片笑みた、いふを聴くこゝちは如何ならんれは方の者ならばそこなも得堪へず道も入りぬべけれど世なきたる功と年といふ頼もし人の力に辛く助けられて動きこそせね道は面うち背きて人知れぬ汗おし拭ふもいとかたいなり、再び故郷にとれ思ひもよらぬとのたまふめれど斯ては愈よ世の風聞も免れ賜ふまじければ只今たゞおぼしたゝせ賜ふべし甲乙も云々と申しつ、など豫てその準備へして来つる体をさへ漏らし初つ、こや〳〵と呼べば一両人入り来りて車さしよせつ、運び出すべき調度ども、て出て、こは直ちに御船ぞ物し侍らん風波たゝぬ汐もかなひぬと申侍るをなど急がせに口惜しやこは謀られしか斯と知りせばなどあまつかも思ふも甲斐なく今ひとめと思ふ人も生憎も不在中なれば奈何かせましなど浅ましう打歎けと怨さるべきけしきならねば心ならず乗るに船場といふ邊も程近ければ疾ぬき着きて帮々乗せらる岸距る、比人々もや、心たちゐたるにや少し隙有りしを見てやをら膝行いでつゝ飛入りたる水音の紛るべうもあらねば船人どもれとみも騒ぎのゝしりて小船くり下しなどいといたう犇めくも道理なり



淡路島一粲圖

淡路島

世の中を渡りくらべてと何某がことも無けないひし邊なほど音に聞こえし灘はさしつゝなる處なれば浪の色の藍よりも濃きに岩に砕くる水泡も雪の花かと見まがふばかり白う散亂る、さまいと怖ろしう打見るだに目くる、心ちせらるれと水夫楫取などはしかすがに物馴れて猶豫なさまにも見えず千尋さへ繩腰に結ひつけ潜入りつ、此處かしこと尋ねもとむる間もなくかき抱きて出ぬるを小船にうつし乘せてとかくあつかふ程に蘇生り賜ひぬ御こ、ちもさして惡からず更の事なれば疾もとの船に移し參らせんとて水夫ども數人してたすけ參るを此方よりも出て辛くも以前の座所にかいすゑぬ如何なる御過ちにて溺れさせ賜ひしにかなど船なる人擧りて訊ね聞くがきすがに面なく耻かしう物憂からんとて調度ども傍にすゑて其が陰に臥させつゝやをら出て藥なども服させて侍りぬれば今霎時が程にいとようなり侍るべし多年眩く病の侍るをも忘れて磯のみるめの珍らしきなるに立出つるをり發りしにや其後の事はえも辨へずと申し侍りきねれ此事にかゝづらひて拔錨が後れつる罪さりどころ無うなど繰返しいへば乘合へる人々はまさ恙なかりし悦びなどいふなるべし船も出ぬ風波穩しくて惱む人

も無く水夫なども暇有りげなれば酒肴など出して飲せ船なる人々にも勸むれば深くは好侍らねど斯る御悦びの宴にまじらざらんはいとつき無るべければとて辭退ながらに酒盃とるもあり船にて物多く喰ふはあしと聞くにほしうも侍らざりしかばさながら貯へ置きつとて割籠めくもの取出て心ちよげに飲食ふもあり水夫等が風にきほへる船唄もひときは聲てなやかに聞きなさるゝは此一杯の力なめりかし昔めのいと愛たきより鳴戸の中將としも語傳へたるおはしましぬとの底にしづける類なき珠を潜得させ賜ひしをば今より男狹磯の君とも稱へ申さんなどいふも醉のを、つまやあらん船の中の人皆がら何某れ妻とのみ思ひたるをあらぞなどは辨解もせむしのびて堂嶋のさきに泊ぬれば急き人を遣りて迎への車など何くれと用意させて三原の家に歸りつかせぬあらずも哉と思し賜ひけんことの甲斐なくて斯弄び見に侍る事のいとくちをしうなど入る〳〵いふをあな喧といひつゝ奥なる一室掃ひ開けさせて此處にすゑつゝな出し參らせそとて遣戸固うし人して守護せたるさまいと異様なりや」

歸りつきし程もなくあやしき語の露に袖うち濡らしつゝ未だ心づようつれなき

けば撓み賜はざりけるよと思ひながらもしかすがに懐かしう如何なる浦邊のあまの苫屋にあかし暮し賜ひけむ聞まほしき心に遣戸のもとに来れば何某は語せにしうとありき斯有きなどありし事ども語出つゝ彼離よりも斯あら〳〵しきつ心あれば然るべき御人々つどへてせん樣も侍るべきに今霎時とてゆるさねば強てとも云きを如何あれば斯隔てがちに疎くのみなる契なるらん御心の裡にはいかに憎ませ賜ふとも此方には毫ばかりも爭で恨み參らすべき親ならぬ親にも子は子として仕へよとこそ聖人も教へ置せ賜ひつれなど涙のひまなかきくどきたる實に道理なりかし此處彼處人を頒ちて告遣りたる使の歸来つゝ何れも只今ただ參るべければとて別に御返事は侍らぞなど何某に傳達るほどもなく此家に重き縁故ある甲乙また常に後見だちて物する油屋の翁など引つゞき入り来る體にて外の方に其けはひもれば此處に有りて亂れたるさま見えんも恥かしうつつましとて隠れの方に急ぎ入りぬ集へる限り一室に入りて何某を中央にすゑて打談らふは如何なる筋にやあらん互にいと忍びて物するまゝ我漏聞くべきよしは無れど徹夜かたりあかして曉天ちかき程に歸り行くもあり殘り留れるもあり其が

中にて彼御寺まで急ぐ事ありとて車出させ遽だしう乘りて出るもありしがいつしか夜はほの〲と明放きて八聲の鷄のこゑいと寒けに難面く殘れる月影に光爭ふ板橋の霜はまづ此人こそ跡つくるなるべけれなど思ひ續くるにつけても如何なる事に仕なし參らするにやと覺束なう立出ても問まほしけれど例の歎きにかい紛れて猶出あへぬ程に大德おはしましぬとて人々騷ぎのゝしりつゝ表座敷に招じ參らせ何某も出て霎時うちかたらへるは斯卒爾に迎へ參らせし畏りなど申すなるべし豫ておほせ賜ひしごと那方の御准備はとく調へ侍りぬといへばさはとて導き參らする体いと異なり侍婢たちのひそ〲うち語らふを聽くに心もとなきのみか軈て誦經の聲の漏れ聞ゆるがいと思懸けず訝しさいはん方無きは髮かきあげ衣かい繕ひなどしてそと立出でつゝ明り障子の隙より窺へば母君の傍には何某をり後には大德の立せ賜ひていとふさやかに美はしき御髮ときすべしてぞ賜ふなりけり餘りの事にうち驚かれて絶も入りぬべく覺ゆるを彼方にも涙ながら見おこせ賜ひつゝ』

行く末はいかになるとのあま小船きみとよるべと賴むばかりぞ』淺ましき

身の程をもいと深く思ひ知りて侍ればなど語り出るを聞も只涙より外ぞなき』世人の誹謗のうしろめたき事は更にも言ず亡夫のためいと罪ふかく斯う淫奔になのめなるをしも打棄てれかば後見だつ人々も無きにやなど人の物いひさがなくあはめられんがいと遺憾しうかたはなるべし此回のことは餘りに遽だしうたばかりつる体ながら俄に斯うさまかへ參らせしも豫て世をよそに思ひ棄て何處のうらにか行ひ澄して在しましゝを伴ひ參らせつる体に仕做さんとての所爲なれば是より後はつとめて這を事實にせんとこそ心に誓ひ賜ふべきわざなれ勤めて到る處ありとか昔の人もいひ遺して侍りしは只迷ふと悟るとの境にて悟れば即ち御佛なりとも申し侍るをなどいと懇篤にいはれしのみか御寺の大德も尊き御法の道よりあらぬ迷ひのさむべき道理ども說き賜ひしかばしかすがに心愧かしうありて頻に斯さまかへらるゝ事とはなれるなりけり年も暮れぬことしきさらぎばかりにや何某が此遠からぬ邊に住む枝川と聞ゆる人は世の覺え人の信用もなべてならぬが其が次郎の君は物學びもいと能うして沈着たる人がらの賴もしげなる由甲乙も詳細に知りて褒るなれば這を聟の君として迎へ賜はむや世に

おほやけにせんは後にしても扨有なん只先づ客人のさまにて迎へ賜ふべくやなど忠誠だちて言入るゝを此方にははう〳〵敷返答もせぬは又如何なる歎きの種にもやと思ひたゆたはるゝなるを爭で此儘にて久しくは在まをべき然るべき御後見の定まらんこそ却て他聞もめやをうるべけれなど是彼勸むるまゝに遂に迎ふる事となりぬ今回はいと穩密て物するなれはとて萬の式もいと省略てはあれど俄に人の出入りも繁くなりはなやぎ賑はしうなれるは去年阿波より歸り着きまし、時とは思ひなしのみならでいと異に樣かはりて愛たし』

彌生はたゞ夢の間に過ぎてはや卯月になりぬ散殘れる梅を、しゝもあへぞいち早く櫻もさき出たり是見賜へやとて一枝たをりて見せ賜へるは去年容かへ賜ひし後移り住れたる東のはなちんでの壷のうちなる一株なるべし生憎に獨なる處にてなまはしたなしとは思へど避くべき筋にもあらねば態と畏み受けつゝ世の春に後れんことは果敢なき花だになほ遺憾と思ふにこそ侍らめ況て年壯き我輩は時世の形勢にも眼をてなたぞ只後きやとのみ心懸くべき事に侍るを學問の道のたど〳〵しう去年の枝折にのみ分惑ふがいと甲斐なくなんなど持く放れて

物すれば物學びに心こめ賜ふを妨なんは便なく心なき所爲に侍れど一たび張り一たび弛ぶとやらんは弓矢の道のみの事には侍らざるべし斯うらゝかに長き日を只書讀むわざにのみ明し暮し賜はんは病の種ともなり侍りぬべしと密にうち歎きて告侍りしが聽過ぐし難くてなんなどあらぬ方に言紛らはし賜へど下には猶心は花にと思をなるべし此方は文案の筆とりあへず」

深山いて、こゝになれ來る黃鳥は霞のよそをとはんともせぞ」とかいたるを花の枝にかへて參らするをとみかう見たまひつゝ」

をり〳〵は霞のよそに音づれよなれし若木の花はありとも」いと心狹ぅぐひすにも侍るかなゝどほのめかしつゝ出賜ひぬ此方はいとえしたなう汗あゆるばかり覺えしも後にはかゝる事の絶ぞあるのみか公け私しの事につけ果敢なき遊びごさにつけ東の方へのみ招ぅせ賜ひ夜更る迄も放ち賜はぬ事さへ有ればば古き例も思ひ出て又如何なる憂き事もや出きぬらんと心ひとつに打歎かれつつ人知れぞ〳〵ほたれ勝なるも表には心地すぐれぞとのみ言做してうち過さるゝを深くもぬなはりもそいつぅるゝ体もなくいと疎くのみもてなさるゝを侍婢な

欠

どもいと思懸ぬことゝ怪しう得有るまじき事と密かいひ合りしに疾う然るべき道理の有りしゝやあらん五月の末つかさ卯の花くたし降つゞきたる宵の程のいとたど〳〵しきゝ又打つれて行方なく成賜ひしハ如何なる禍津日の神わざゝやと思ふべありいとも〳〵怪しき迄ゝなん』

夜深く風吹きいでゝ遣戸ならを音の物恐ろしきゝハ寐もやられず如何なる事のありてゝ東殿ゝ斯ふかし賜ふらん侍婢して促がし參らせんもはしたなき様ゝ思をべしなど人知をず思ひ煩ひつゝ孤燈挑お盡してをかいへる事など繰返をゝ此北ざまなる壷の隔の戸と思しきがいといたく音して破損れも仕つべく覺ゆるまゝに次なる人喚び覺して見させるに遽だしく歸り來つゝ御壷の戸のさならで常ハ開き賜ハぬ方のきへ開たるハ樣かはりてこそ侍りぬれ盜賊などの入りて立ち忍ぶゝハ侍らぬあ生憎に紙燭の火もうち消たれて侍るに樹立ちのを暗きがいと物凄まじき心地のし侍りしかば見返りもせで引入り侍りぬと息もたえ〳〵ゝ語るハ例の物怖ぢする性質とハいへ遣ゝ聞過すべき筋ゝもあらぬ然らバ東の方へ參りて云々と告參らせよ擒分め賜ふかあらぬかハ彼方の御心ゝこそあらめ

るを毫ばかりも用ひさせ賜はぬえてこそ悲しけれと衣うち蔽ひつゝ傍を見れば
果して押巻きたる紙ありとる手も遅しと火あかくして見賜ふに
親母先だつ道を知らねばといひ遺されしを思はぬにしも侍らねど斯心苦し
き事のさし續きたるは自然あり果つまでき堪ちとこそ覺て侍れ彼廣石の人
の上より御寺の事どもの聞えし際も早う身をなき者として諫め參らすべく
は思立ちながらも鳴戸の波の立返り何時かはれだしき瀬にもあふべきにな
ど甲斐なき空だのめに心惹れて思ひのどめ侍りしも今更にいと遺憾うなん
亡らん後は何處の里にか立隠れ在しますとも疾もとめ出て再度此家刀自と仰
き賜はんこそ願はしけれさるは外聞もいとうたねにあのめなる所爲には侍
れど、ても世を捨させ賜はぬ御心とは奈何とかせん世の人のとかう聞えん
がいと物憂く御齢のまさり賜へるがふさはしからず思はるゝなどうしろめ
たう心苦しき事はうぞへもあへねど斯なり果る身のほどを哀れとも思し賜
はゞさは咎め賜はで只おだいふ事無らん様はからせ賜はん事こそねがはし
なれ猶聞えまほしき事は限りなくさはに侍れど心遽だしきほどにて

など今はの筆の蹟とは見えず記きつらねたる心操の男々しさに打見る人々はなかく／＼に昏惑ひて此日ごろつらき境にのみ立ちながら憂しとだに云ぞかゝる果を見せるがいと惜うなど云續けつゝおほやけにも聞えあげて其方の事どもより野邊おくりなど迄皆打集ひてとゝく見あつかひ果し後は彼行方なき人もとめにとて遠近に人領ちて尋ぬれど其おとづれの有るにもあらでいつしか葉月も半過ぎにたるが何某のみは家にも歸らず此處に逗留て後のわざ營みながら萬に心つくせば主なき宿とて荒廢ぬべくもあらねど何となく物悲しう時知り顔に散り初たる墻もとの桐まだ色づかぬ作の木だちさへ顧さらせてなど門凉みの物語にも先うち出ると何人か聞え傳へけん怪しう例なき事にいひのゝしるさへいと可哀なりかし

淡路島　終

埋火

第一回

南新二

點る茶のあるきを人乃交りに語れやかたれ埋火のもと茶の湯の道は禮學の一ツにして其原因は禪より出賓主の禮を厚くし月花の折にふれて貴と無く賤と無く親み語るの媒と爲ば身を修る栞とも成べきに今は嬌奢の器に買られて財を失ひ産を破る者勘しとせず爰に尾張國名古屋の城下に瀧新右衛門と云ゑる豪商あり祖先新右衛門は織田の臣にして武功有る者なりしが都本能寺に信長討れ給ひより剃髮して宗庵と稱し武野紹鷗の門に入て茶道を學び八十餘歳の壽を保ちて死せり其子新右衛門商となりて名古屋に住し代々種油乃問屋を業とせり今七世の孫に至りて倍々家富榮家屋も甚廣やかなり左らぬだに名古屋の城下は茶道を嗜み無きものは世間の狹きが如くなる慣習なるに瀧の家は祖先宗庵より持傳へたる器物ども多く藏し當時の新右衛門は殊更に茶事を好み雪の朝月の夕には人々を招き爐邊の松風に耳を傾るを此上無き樂みとは爲ぬ同じ名古屋に羽淵秀廣と云へる醫師有りて貧者ながらに茶の道を好み常に瀧の家へ出入て勝手の働き水

屋の掃除など爲調方なる人物ゆゑ主人も友無き折の詞敵と爲しが瀧の家に傳はる茶器の内に第一の寶と爲呉の祥瑞が作の瓜形の香合有り此香合は立瓜と稱する世れ常の物ならぬ瓜は織田家の紋なればとて信長深く愛し自ら高麗野と銘し給ひぬ這は高麗野は瓜の名所にて又た唐の器物なる意にも通へり故に片時も傍はらを放し給はぬ陣中へも携へられて愛玩最も深かり桶狹間の戰爭に祖先新右衛門は先陣に有りて敵の首を母衣に包み本陣へ參りたる容は高麗野の香合を帛に包みしに似たりとて感賞の餘り彼の香合を當座の褒賞にとて下されたり新右衛門は面目身に餘りて君恩を子孫に傳んとて立瓜の形を家の紋所とは爲ぬ斯る由緒正敷香合なれば年毎の虫干にも當主新右衛門自之を扱ひ三重四重の箱に納て秘藏したり然るに今年は祖先宗庵の年回なれば彼の香合を取出しく口切れ茶れ湯を催し知己親戚を五客宛に分ち引續きて茶を出すにつき秀廣は日毎に來りて待合の拵へ水屋の飾り付など忠々敷働き已に數會の茶の湯も首尾能濟て秀廣が道具を取片付る折しも彼の香合の棚に有りしとフト見て思ふやう世に珍敷器物も有るものかな今の世に至りては何程の價有るものならんと何心無く取上て

打返し見たるに誤つて蓋を水屋瓶の上へ礑と落し眞二ツに打割さり秀廣は餘りの事に前後を忘じ落たる香合を拾ひ取べき心も無く只我にも有らで眺居りて稍有りて身うちの汗を拭つゝ思ふに此名器を打割からは何の面目ありて生て主人の前に出べきぞ此儘に淵川へ身を沈めて云ひ分を爲んものと其儘割たる香合と幾重かの箱に納め置俄に不快なる由と斷りて我家に走り歸りしが秀廣の妻は先年死去し只一人の男子有りて名を彌三郎と號今年十八の春を迎へ父には似ずして甚容貌好く源氏業平にも批する程には有らねど女子に爲て見まほしき顏ばせなるに稚きより學文を好み醫業の一ト通りは父の教に寄て學び怜悧人に越たれば秀廣の愛最も深く何事に寄らず彌三郎に問ひて事を爲を常と爲しが此日彌三郎は家に在りて藥をきざみ居たるに突然父秀廣が歸り來り物をも入ねぞして思ひ云し容なるに顏の色さへ常に異なれば必定瀧の家にて何か事の有りしならんと茶を汲て父の前へ至り 彌「那父さん大層お早うございましたお茶を上りましト出したる茶碗を取ながら彌三郎の顏を見てハラ〳〵と涙を流し 秀「コリヤ彌三郎己れ死なねばならぬ事が出來た未だ廿に足ぬ其方を一人殘して死ぬは如何に

も心障りなれど何事も前世の約束と諦めて死後の事を頼むぞ彌三郎さらばジヤと立上る袂を押て　彌「何事か存じませんが命を捨ると仰有られ餘儀無い事とはお察し申ますが諺にも膝とも談合と申ではございませんか増て親一人子一人の私し平常譯も無い事をもお話しなされまするに今日に限つて何のお話しも無く死に往と仰有をへイと云つて出しては上られません如何でも生て居られぬ事ならばお止は申ませんマア私しに一ト通りお聞なすつて下さいましと云はれて秀廣はドツカト座り　秀「成程氣の間儘に仔細を云はぞ出やうと仕たは惡かつた其譯と云ふは斯云ふ次第だト高麗野の香合を誤つて割し由を物語れば彌三郎は事も無氣にカラ〳〵と笑ひ　彌「ハテサテお氣の狹い夫式の事で二ツと無い命を捨て耐ものでございすまか先篤りとお考へなすつて御覽なさいまし成程高麗野の香合は瀧の家においても身にも家にも替られぬ寶でもございましやうが夫は高が商人一軒の家内に大切と爲迄の物で世界の寶ではございませんヨシヤ世界の寶にもせよ其品が割ては人命に關るとか一家が滅亡爲とか云ふ品ならば知らぬ事云はゞ一ツの贅物たる迄の事で何の用にも立ぬ陶器の爲に捨るやうな不用

お命を持た者は一人もございますまいぞと説付られて我子ながら適れ度胸の据つた云ひ分と感じては見たもの丶今にも瀧の方より呼に来らば何と云ひ分を仕たものかと心ならねば聲を竊め　秀「三ツ子に淺瀬の譬に似たれど其方の意見も一理有れば死ぬは思ひ止まらうが今にも香合の割たを知らば我業ならんと思ふは必定迎ひの人の来らぬ間に何處へなりとも身を隱して兎も角も世を送るべし彌三郎手廻りの品を取集て裏道より早く〳〵と聞に開たる父の顔を彌三郎はジロりと見て　彌「逃亡も未だ早うございます　秀「落付て居る間に使ひが来ては逃損じる　彌「參つても仔細ございません何事も私しへ任せなすつて那方は搔巻と枕を持て二階へ上り少しお氣を落付て出なさいまし瀧の使と同道して私しが參り宜いやうに申て見ませう其上事の破れた時は逃亡なりと身を捨るなりと其時の御相談で如何でも成ます一時でも半時でも心配は身体の毒マア安心して一と寐入なさいましと落付拂つた我子の詞に漸く一と息ホツト吐て二階に上り横には成れど瀧よりの使を今か〳〵と眠りもやらぞ考へ居たり下には彌三郎が何氣無く玄關にて以前の如く藥を刻ざんで居る所へ案に違はぞ瀧の手代が息を切

て駈来り　手代「ハイ頼みまを秀廣さん大急用大事だ私と一所に早く〳〵と怒鳴立るを豫て期したる彌三郎ハ左あらぬ体に莞爾笑ひ　彌「何事ゥ存じませんが親父ハ先刻急に腹痛で宅へ歸り二階に伏つて居りまをれバ何れ快方成次第御使ひハ無くとも參上致さねばなりませんが何分只今直にと申譯にハ　手代「イヤ〳〵其全快を待てハ居られぬ是非とも私と同道して来いと旦那が強い聞込み譯ハさつばり分らねど平常落付てござる旦那殿が急がれるからハ餘程の急用と見へる秀廣どのを連て往ぬ時ハ第一私が失敗らねバならぬ迷惑でもござろうが私が脊負てなりと往程に其事を云ふて下されと強て云ふに彌三郎ハ尚落付　彌「成程れ前の困るハお氣の毒なれど力づくでいかぬが人の病氣万一強てお連なされ途中で差重りでも致したら何となさる掛替の無い一人の親ゆゑ是ばかりハ強て出してハ遣られませんと云ハれて手代ハ天窓を搔　手代「お前のやうに云ハれてハ中へ立私が困るばかりと云つゝ病人どのを無理に連て往と云ハれて見れバ心配なもの其方も宜し此方も宜しと云ふ上分別をコレ息子どの考へゝ見て下さらぬかと授首をるを彌三郎ハ爰らが汐と小膝を進め　彌「左様ならバ斷致してハ如何でござ

います親父の名代に私しが上りまして旦那様へ此譯をお話し申たられ前さんの御迷惑にハ成まをまい御覧の通り無人もゑ實ハ病人一人置て出るハ好ませんが夫程に仰有る事ゆゑ私しで濟か濟ぬか上つて見やうでハございませんかと聞て手代ハ横手を打　手代「イヤ其相談で落付ました夫で私の手落ハ無いと云ふもの迷惑でもござらうが其通りに頼ミますと云ひつゝ額の汗押拭ひ其手拭ひをくる〳〵廻して胸のあたりを仰ぎ居たり彌三郎ハ納戸より羽織を持来りて引かけながら椽の下より取出す下駄ハ手作乃捻鼻緒流石に是ハと傍らの父の草履に踏替て袂へ兩手を差入つゝ手代と倶に出往さり秀廣ハ二階を竊に下て出ゆく彌三郎の後かけを見へる限り見送りて大息吐て居たりけり

●第二回

瀧が家にハ秀廣の答如何と待所へ手代が彌三郎を連て歸り斯々の次第にて名代に来りし由を主人に告待せ置たる店先より彌三郎を伴ひ入れ疊廊下を二ツ程曲り入側付の廣座敷を通り抜て四疊敷の小座敷へいざとばかりに座を勸むるに年若なれども彌三郎ハ臆をる色も無く下座へ座を占先四方を見返るに爰ハ數寄屋

に繼く鎖の間ニて丸木柱の袖床ニ江月禪師乃一行物を掲うるわしき青磁の中かぶらへ白玉椿を挿助炭ニて釜ハ見へねど向ふ切の爐へ釣釜を掛たり天井ハ黒部杉の板ニて棹ぶちハ竹なりスサ壁に大形の下地窓有りて長押なる喫茶三昧の板額ハ小堀遠州の字形とぞ知らる二枚折の小屏風ハ枯木に烏の墨繪にて俵屋宗達の印有り侘を表と仕ての好事至れり盡せり如何ニも數代打續きての數寄者なるハ一目して知られたる家の容なりけり斯て越前の鳥の子紙もて張たる太鼓張の襖を靜ニ明て入來るハ主人の新右衛門とて鈎瓶形の煙草盆を自ら提來りて後を見返り「コリヤ〳〵彌三郎どのニ座蒲團を何故出ぬサア〳〵其處でハ話しが出來ん此方へお進みなさい御親父にハ毎度種々お世話になつて忝けなく存じますお前も茶事ハお好なさうな若いニ感心な事で夫何哥もお尋ね申度ハ秀廣どのゝ病氣の事じや平常ハ丈夫な人だけニチト不養生な事でも有つたか思ひ寄らぬ急な發病で嘸々御心配だらう如何でござる少しハ宜方かなと何氣無き主人の挨拶に彌三郎ハ度氣を拔れ斯云ハば此云ハん此云ハば斯答んと思ひしも皆畫餅となり僅ニ答を爲のみなり新右衛門ハ打笑ながら膝を進め 新「時ニ御內々でチト

御相談申度事か出來致して急に御親父をお招き申した所お前が名代にお出になつたのハイヤ大きに御苦勞な事デ併し爰でハ話しも出來かねるゆゑ斯致さう幸ひ數寄屋にまだ釜も掛て有れバ一服上りながら相話しを致しませうコレ〳〵爰の庭へ露地草履を二足廻して數寄屋へ灯を付ろサア彌三郎どの御案內ながら私しがお先へ出掛ますから遠慮無しに一所にお出下さいト主人の案內に辭退もならず云ふが儘に庭へ下立飛石傳に萱葺の中門を越て數寄屋の庭へ入て見れば早石燈籠へ灯を點じ夜に入しゆゑ水ハ打ねど鞍馬石の手水鉢ニ添て湯桶を出し有れば彌三郎ハ是ニて手水を爲うちニ主人ハ先へ數寄屋へ入たり引續いて踏脫石ニ上りて內を差覗けば席ハ三疊大目にて四尺ばかりの床に一軸有れども夜目なれば定かにハ知れぬ真塗の爐縁ニ霰の釜を掛て甚清らかなりにじり入て先床の一軸を見て次ニ道具疊へ廻り釜を見畢て座に着し所へ太鼓張の火燈口より新右衛門が立出てサア〳〵此方へお出なさい今日ハ年回の茶事も先事無く濟だと存じたらイヤ大きニ草臥ましたコレお山彌三郎どのに御挨拶を仕て炭を直して呉ろト呼れて出來るハ新右衛門の妻お山にて年ハ稍四十に近き程なれど若やかな

れバ七ツ八ツハ下に見ゆべし身の廻りの拵へも派出を好み縮緬へ流行色の小紋を置せたる小袖を重ね無地博多の帯を胸高に結び裾さむきに連て蹴出をハ江州に産をる縮緬なるべし彌三郎に向ひて時候を述父秀廣の病氣を尋ねなどして後勝手より炭斗を携へ来りて炭の手前に掛りぬ新右衛門ハ彌三郎に向ひ「時に彌三郎どの御内々れ話しと申ハ別儀でも御座らぬが此瀧の家ふ無くてならぬ香合がござる事ハ定めてお聞及びも有らうが其香合が今日真二ツに毀れました併し是ハ家に附ての名器で天下の名器と云ふ譯でもござらねバ左のみ悔むにも當らねども數代無難ふ持傳た品が我代に至つて損じてハ如何にも祖先へ對して申分も無い次第でハござらぬかト云つて割た器物が元のやうふ成べき術もござらず遺憾ながら繕ひでも致して置の外ハ無いが水屋の働きハ御親父へお任せ申して有る故是を家内の者へ知らせる時ハ御親父の業と誰しも思ふに相違ござるまいさうなる時ハ年来御懇意を結んだ御親父ながら止を得ず當家へ立入をお断り申是迄少しばかり御用立て置た金子も他人向に致さねバならぬ事夫を如何か其處迄に致し度無い所から御親父をお招き申した所御不快と有れバ致方の無い事

ながら爰に一ツの御相談がござるが一ツお考へ下さるまいか損じた香合ハ此儘人に知らせず箱へ納て土藏へ仕舞ひ込めバ誰も明て見る者ハござらぬ偖實の所ハ信長公より賜つた品ハ只一ツなれど其後私しの代に至つて寸分違ぬ香合が手に入り双て見ても何れが何れやら知れぬ同質同品ゆゑ是をも大切に所持致して居つた所先年大坂の骨董商竹屋と云ふが參つた折に彼の香合の事を聞及び一覧の事を云ひ込まれたれど容易に人にハ見せぬ品ゆゑ迷惑にハ思ひながら御城内の重役からのお聲がゝりに辭す事もならず一會催ふして二ツとも竹屋に見せて歸した後松平周防守様が大坂御城代の御勤役中彼の竹屋からお聞込みになり御覧なされたいとの御沙汰なれど如何にもお役柄のお頼みでも重代の品を手放して大坂へ送る譯にならねバ私の買た方の香合を慥な手代に持せて大阪へ登せ竹屋からして周防様の御覧に入た所是非に讓れと強ての御沙汰で買た時の直段より倍した金を下されたれど讓るが否さに何の彼のと御免を願つて居るうちに周防様ハ御老中に御轉役なされて其儘江戸へお持下りに成た其後ハ何を云つても川向ふの喧嘩先祖傳来の品ならバ何事置ても取戻しに往が根が私が買た香

合ゆゑ夫なりけりの泣寐入れ今日まではは濟して置たれど家の寶が毀れて見れば
那の品が有つたらそつくりと入替て又元の無疵な物に成らうと思ひ急に周防樣
へ上たのが欲く成り如何ぞして取戻し度思ふ所から一ツの御相談が致し度と存
じ付たので御代は替つても先は御大名御先代の御秘藏なされた品は何處へも行
氣遣ひの無いは知れた事ゆゑ御苦勞ながら御親父に江戸へ下つてお貰ひ申して
周防樣へ其譯と云ひ上て香合を取返して來ては下さるまいか代金は其折二百兩
頂戴〳〵たもゑ夫と極れば直に飛脚で金をば送り其外路用も私から進ぜませうが
人に知れぬやうに江戸見物と云ふを表にして何と出掛ては下さるまいかと案じ
相違の頼みを聞て彌三郎は張た肱の縒め途も無い程の安心に委細承知と云ひ度
は思へど爰で云つて内兜が見へてはならぬと態と驚きし体にて　彌「私しなぞも
噂に伺ひましたばかりの御重器が如何致して損じましたかれ水屋働きは親の秀
廣ばかりと有れば万一親の粗忽ではございませんか何に致せ立歸りまして一應
父を吟味致し其上のお許ひに願ひませうと顏色替て立上るを新右衛門が呼留て
新「イヤ〳〵お若いから無理も無いが吟味だてを爲くらゐならばれ招ぎ申して

此れ話しは致さぬ只何事も人に知らさず無事に納め度のが望みでござれば歸ら
れても香合の損じた原因は捨て仕舞ひ今れ話し申た一儀を何分にも御承知下さ
るやうに願ひ度ので万一世間へ此事が聞える時は三都に縺くとは云へ土地も狹
く瀧の家の箔が一と廉取れると云ふやうな場合ゆゑ此儀を御含下されて何卒御
心配に預り度が如何でござらうナト云ふに彌三郎は額の汗を襦袢の袖で拭ながら
ら　彌「イヤモウ其深ひ思召を父に伺せましたなら淚を翻て有難がりませう併
し一應申聞ましさ上早速にれ受を申上る事に願ひます　新「御尤もな事で何卒其
れ都合に願ひまをがモシ御親父ばかり江戸へ手放して遣るを心配なさるなられ
前もれ出なさい留守宅の處は手前方で引受て急度守らせて置ば其邊は必ず御懸
念無く御相談下さるやうに致し度ござる　彌「殊に寄ますれば同道致しますかも
知れませんが何事も父に申聞ました上　新「勿論の事で併し御出立なら全く江戸
見物と云ふを表まして早々出掛ては貰ひ申さねば成まゐまいから今晩にも御挨
拶下さる樣にお頼申ます　彌「直さまお暇致しまして　新「折角今家内が炭を直し
て煮が付たから一服上つて歸つて下さいと云ひつゝ手を鳴して　新「コレ〳〵云

付た饅頭が蒸たら持て來いイヽヤお急だから其蒸鍋の儘菓子盆と楊枝を添てソシテ御新造に煮が付たから一服點て彌三郎さんへ上ろとさう云へど云ひ付る主個の容子に彌三郎ハ片時も早く父と安心させんと思へど夫とも云ひかねて薄茶一服に饅頭一ツを喫し手前の終を待かねて暇乞ひもソコ〳〵に急いで我家へ立歸りぬ

第三回

那父さん只今歸りました　秀「オヽ彌三郎歸つたか勢ひ能く出てハ往たが大分手間が取れるゆゑ大心配をして居たが如何だ六ヶ敷云はれて煕困つたらうシテ如何ゑ勘辨仕て呉る事に成たかと聞込む詞に彌三郎ハ聲を竊め　彌「那父さん思ひの外の好諾しでございますモシ那方が先刻命でもお捨なされバ夫こそ本の犬死でございましたと云ふに秀廣ハ少し落付　秀「サウ聞ても己ハまだ落付れぬ瀧の御主人が何と云はしたつか早く話して聞して呉ろと問れて此方ハ膝を進め　彌「私しが參ります途中もモシ斯云つたら何と云はう何と云つたら斯答やうと胸で工風をして參ると案に相違して私しを茶室へ通し斯々の話して私しの腹組

が喰違ひ夫からと云ふものハドギマギ仕て掛物ハ何が掛つて居たか茶も菓子も味が分らぬ早く歸つて御安心をお爲せ申度ハ山々なれど始め素を切つた詞が有れバ狼狽歸る事もならぬ實に困り果ましたが直に歸つて父とも相談の上お返事をと云ふを汐に漸く歸つて參りました何と旨い都合でハございませんかと新右衞門の云ひし事を落無く語るを聞秀廣ハ忽地に愁眉を喜びの眉に替て　秀「ア、有難い〳〵既に命までも投出す程の心配で神佛を滅茶苦茶に祈つて居たが凶が吉に歸るとハ此事だらうマア今夜ハ寛りと相談して承知の返事を爲がよからう　彌「イヽエ瀧の方でハ今夜中に答が聞度と呉々も云ひましたから寛くりとハ出來ません何にしても先の云ふ通り承知するより外ハ無いが私しが爰に殘つた所が病家を廻る事ハ出來ぬ詮の無ひ譯御一所に參れバ私しも安心那方も御安心でハございませんか　秀「勿論の事往に限る往て呉んでハ第一己が困るなら是非一所に往と極て呉ろと爰に相談一決して直に其夜瀧の方へ承知の由を返事に及び翌日秀廣ハ病氣も大きに快方なりとて瀧へ至りしかバ路用にとて金五十圓を渡し尚不足なれバ沙汰次第送るべし旅の仕度も有らんが一日も早くと閙立られ近

邊の人々へは江戸見物がてら知る人を尋ねる爲出立する由に云ひなして名古屋を立出しは十月の中旬にて晝中には汗ばむ迄の霜凪日和なれば羽淵親子は道すがら紅葉の色々なる野山の眺に思ひしより足も進みて同じ月の末に江戸の入口なる高輪へ着しかば八ツ山下の出茶屋へ腰を掛て往來の容を見るに流石大都會の入口とて其賑はしさに我を忘れ心とも無く眺居る所へ一挺の山駕籠と茶屋の椽先へ舁寄させ駕籠より直に椽へ出る一人の男有り倶襟の半合羽に紺の脚半を付手に角造りの脇差と和蘭陀木綿の合切袋を提て秀廣等に一寸と挨拶して衝立屏風の那方へ座しながら　男「駕屋御苦勞だつた觀音前から杖を抜たお影に此分じやア日の有る内に池の端まで歸られるから都合が宜　駕「ヘイ旦那は度々江の島へ御參詣なさいますが今時分は江の島も寒いので本の御信心參りでございますネ　男「お前達にまで顔を知られる位な旅好だから江の島ばかりじやア無へ年中歩いて何の事はねへ道中仕を見たやうだ　駕「オイ〳〵姉さん如何したんだ茶を早く持て來ねへか　女「誠に相濟ません旦那お歸りでございますかお早うございます　男「ム、往がけにやアお世話だつた何時も賑かで宜ノ　女「有難うございます　駕「エ、コウ棒組旦那は下谷の池の端で竹喜さんと云ふ茶の會の道具屋さんだが滅法道中がお好で爰して此方徒らまで旦那の顔を見覺えるテーナア容易な金じやア出來ねへ所業だゼ　棒組「手前は夫だから野呂藏だと云はれるんだ　駕「何故　棒「何故ツテ篦棒めエ旦那ナア遊びながら金が儲るんだ　駕「ム、如何云ふ譯だ　棒「茶の會の道具テエ奴ハ己達の目にやア分らねへ猫の碗を見たやうな物でも百兩の二百兩のと爲ものが何程も有るトヨ其奴を飛だ播隨長兵衛じやア無へが遊山半分江の島のと方々見てお歩きなさるからソレ一番掘出し物にぶつかりやアお大名方へ持込んで旨へ儲が有らうじやアねへか　駕「夫じやア己も立場の婆に頼んでチツト茶の會道具に成さうな穢ねへ物を取て置て貰てなアハ、、　棒「立場と云やア最そろ〳〵旦那參りましせう　竹「ム、早く歸つて一杯呑せて遣らうオイ〳〵姉さん茶代は爰へ置ヨ　女「マア宜しうございます御寛にいらつしやいまし　竹「イヤ大きにお世話に成たト以前の駕籠へ乘移らんと爲所へ衝立を押遣りながら秀廣が這出て　秀「ア、モシ失禮ながら一寸お待下さいましと云ふに竹喜は振向く　竹「遂ぞ見掛ぬ那方さまね　秀「ヘイお初にお目に掛り

ました私しどもがお引留め申ハ餘り無仕付千万でハござりますが只今是で承まはりますれバ江戸でお大名方へ茶道具をお納なされます御家業さうでござりますナ　竹「ヘイ江戸にハ唐物屋の大家が多くございますから私しどもハ本の小商ひでサウ手廣にも致しませんが少しばかり茶器を扱つて居ります　竹「夫ハ宜お方にお目に掛りました是に居りますが私しの悴でございますが此方親子が出府致しましたハチト尋ねる茶器がございまして馴ぬ御當地へ出てハ參りましたが西も東も知らぬ人ばかり如何手蔓を求めたものかと實ハ思案して居ります所へ那方様の御容すを計ず承まはり少し便を得ましたやうな心持でございます何れ明日にもお宿へ上り願ひます事もございましやうが是を御縁に御面倒を願ひ度ぞんじます　竹「シテお名前ハ　秀「私しハ羽淵秀廣と申醫者で悴ハ彌三郎と申ます若輩もので國所又其尋ねまする品等ハお宿へ出ましてお話し申上ましやうが下谷池の端で竹喜さまと尋ねますれバ知れましやうか　竹「池の端仲町とお聞なされバ直きに知れます家業の事ならバ一應お聞申た上居きますだけハ御相談致しますやう何に致せ只今ハ歸り掛て急ぎますからと駕籠を急がせて歸りゆきぬ

秀廣親子ハ江戸へ着し早く池の端へ尋行て彼香合の事を頼まんものとソコ〳〵に茶屋を出て其夜ハ本芝二丁目の瓢箪屋と云へる旅店へ泊り翌朝時刻を量つて池の端へ尋ね行しに竹喜ハ折好く在宿なりしかバ昨日高輪にて云々の事に依りお尋ね申たりと云ひ入るに先店へ通して休息せしめ暫時有りて此方へとの案内に左り手の木連格子を明て椽側を通り八疊ばかりなる座敷へ至れバ爰ハ來客を招ずる所なるべし七尺ばかりの袖床に江月の横一行を掛前に春日卓を置て青磁銀ぼやの香爐右手の琵琶棚にハ古備前の茶生を置て白玉の椿を挿たり茶煙草盆火鉢を出したる後主人喜三郎が出で來り先秀廣に向つて　喜「是ハ宜お尋ね下されました御子息も御同道で上野でも御見物にお出でございますかと挨拶する間に勝手より子僧が根來の名々盆へ蒸饅頭を盛たると堀出し唐津の小服へ薄茶を點たるとを持來るを押頂いて呑畢り秀廣ハ少し座を進めて　秀「初めて參上致して打付ました事を伺ひますが茶器をお扱ひなさるが御業体と承えりましたが諸家樣へも定めてお出入を成されましやうナ　喜「ヘイ多くも致しませんが八九軒お出入を致す所もございます夫に付て何ぞ御用でも　秀「ヘイ只今では如何か存

たませんが御先代様は餘程のお數寄者と伺ひました松平周防様は御當代もお茶事を遊しますか那方に伺ひましたら知れましやうがト夫ゆゑ上りましたのでございます 喜「イヤ今はお茶はなさらんと申事で御承知の通り御先代は妙顯様と申て大のお茶人でお好物其外も澤山有りましたがお勝手向などのお爲には餘り宜く無いと見へて今の殿様は更に遊さぬと申事で 秀「併し御名器類は其後お拂ひ抔には成ますまいナ 喜「左様サ町人抔とは違つて諸侯方の事ゆゑお拂ひ物が有れば何れ私しどもの仲間は皆手掛ますが周防様のお拂ひ物と云ふは聞及びません 秀「實は那のお屋敷へ先年納つて居りました祥瑞在名の立瓜の香箱がございますが尾州名古屋に瀧と申商人がござつて其者の所持を御先代周防様が無理に御所望遊ばして二百兩下された品なれどチト仔細有つて今度私し親子が江戸へ下りますを幸ひ先様はお代替りに成ても御家來衆は其時の方が殘つてござらうから代金は元の二百兩へ利を添てなりと買戻しが成なら頼み度との事で私しの爲には恩人ゆゑ引受ては參りましたが何處を聞て宜やら譯分らず困り果て居つた所昨日ハツ山下でフト那方にお出會申茶器の御商賣とのお話しにヤレ好お人

にお目に掛つたと直にもお話しをとは存じましたが餘り失禮と心付て今日參上致しましたが此お扱ひは如何でございましやうと思ひ入つた秀廣の容子を見て
喜「イヤ家業の事ゆゑ如何か出るものなら引出して上ませうが屋敷は何方も役人への進物が入ますが出來ると成たら其處は御承知下さらぬと左支ます 秀「其邊は國元から送りますを筈に成て居りますれば決して右左はございません失敬ながら御骨折のお禮も致させます心得で居ります 喜「商ひの歩合は其節の事で外にお禮の何のと云ふは無益だからお斷り申ます併し急にも分りますまいから御旅宿をお聞申て置て容子が知れたら人を上ましやう 秀「ハイ左様願ひますれば有難うございますが實はまだ旅宿を定めませんが馬喰町の相善へ參る心得で居りますから 喜「承知致しました分り次第御左右申ましやう 秀「是は御用多の所へ出まして御迷惑を掛ましたと彌三郎と倶に叮寧に挨拶をして竹喜の家を出其日は上野より淺草邊を廻つて馬喰町の相撲屋善藏方へ泊り竹喜からの沙汰を今日か翌かと待うちに早くも五日を經て師走の初と成しに宿の下婢が二階へ來り
下「下谷の竹喜様がお出なさいましたと云ふを半分聞て秀廣は二階を走り下店

へ出て　秀「コレハ〳〵此方へお出下さいましては何とも恐入ます先如何ぞ二階へと手を取らぬばかりに我儕切り居る座敷へ連来り座蒲團の上へ招じて過し日の禮を述彌三郎に云ひ含て茶菓子の注文を爲を夫と見て　喜「イヤ如何ぞお構い下さらぬ様に願ひます私しは或お華意へ正午の茶事に參りますから長座は致して居りません偖先日お頼みの一條を漸々手蔓を持まして聞合せました所が周防様の御存生の頃お輿で老女を勤めて居られた嵯峨野さんと云ふが至つてお氣に入でお茶のお伽に與向ては此人に限る様で有つたと申事で御存生中に彼に香合は右の嵯峨野さんが拜領して大切に持て居るうちに殿様がお亡りに成たので嵯峨野さんは髮をおろし妙關様の妙の字を頂き妙叔尼と改ためて實家へ下られた時が丁度五十四五で有つたが其實家と云ふは本所邊の岩田とか云ふ材木屋で繁昌仕て居た所がフト相場の行違ひから左り前に成つて遂に店を仕舞ふ事になり妙叔尼は小梅とか受地とかへ小さな庵を結んで氣の毒千萬な体に成たと迄は分りましたが偖肝心のお尋ねなさる香合は如何成ましたか知れかねると申事で併し定めし周防様のお箱も有らうし形物の香合ゆゑ世間へ出れば業に爲私しども

の耳へ是非這入筈なれどトント聞及ひません所を見と其尼さんが今に持て居られるかも知れませんが其處は如何も折角のお頼みながら分りかねますと竹喜の話しを聞取つて秀廣親子は顔見合せ當惑したる体なりしが彌三郎が膝を進めて　彌「漸々とのお骨折で勝手を知らぬ私しどもが居ながら容子を聞ましたのは全く那方のお骨折ゆゑで有難う存じます又考へて見ればお大名のお藏品が下々へ出て居れば手に入るは安い事如何ぞ其尼さんを尋ね當て今に彼品が有りさへすれば手に入れるには都合が宜しいと存じます　秀「悴の申通り御心配下さいましたお蔭で先手掛りを得ましたと申もの何れお禮には上りますが態々のお歩びを下さいまして誠に恐入ます　喜「又た小梅邊には得意も有れば心掛て尋ねて上ましやうと甚深切に力を添て竹喜はソコ〳〵に立歸し跡に秀廣は腕組して　秀「何にしても其妙叔どのを尋ねて見度ものだが小梅と云ふは何方の道か帳場で聞合せて翌は早く出掛片端から聞て歩いたら知れぬ事は有るまいが首尾好所持して居られゝば重疊だがと心配顔を彌三郎が容々に慰めて其夜は早く枕に就しに秀廣が寒さに中りしにや夜明頃より腹痛にて最初は彌三郎が撫さすり用意の丸

藥を呑せなどして人に語る迄には無かりしも漸々と烈敷なり果は病床を轉げ廻る苦しみに相撲屋にても捨置れねば醫師を招きて療治を乞しに全く馴ぬ土地にて寒氣を引込みたるものなれば四五日も經ば平癒すべし風に當ぬ樣にと云はれ小梅へ出向べきすべもなく五六日を過せしに腹痛は止しかども二三日晝夜の苦しみに老人なれば疲勞して急には床を離るべき体も見へず醫藥の代に路用の金の盡るを待が如くなれば秀廣は頻に心を痛め一と日も早く小梅へ至りて妙叔尼を尋ね度けれど其身は心に任せねば彌三郎を出し遣らんと度々其事を云ひ出せど彌三郎の外には看護の者も無く便所通ひも二階の事故何かに付て人手も掛れば彌三郎は出るに出かねて心ならずも半月餘りを爲事も無く送る内に思ひの外に入費も多く斯ては上等の宿屋に日を送るは無益なりとて竊に安宿を聞合せしに本所横網の片町に鶴屋お藤と云ふは安宿ながら商人のみを泊る家なれば彼處に移りたまへと勸むる人の有るに依り秀廣にも思ふ旨を告て世間は歳暮の往來閙しき廿日過に横網の鶴屋へ宿を替たり此鶴屋の女主人お藤と云ふは年齡五十餘りにて一人の手代に帳場の事を任せ自分は近所の貧者へ小金を貸付置て月

〳〵に臍繰金の殖るを樂みと爲吝嗇者なるが麻布邊の某院に待士を勤め居る一人の甥有りて折々に金の無心を云ひ越すと流石のお藤も眞身の事とて何時も彼臍繰を出し遣れど帳場の手代にすら此事を隱し竈の火焚を業とする九助と云ふ男を使ひに遣れば甥も夫と知りて近所まで來れど鶴屋へは顏を見せず九助に云ひ含ては無心を云はするが常なりしが或日例の九助が一本の手紙を持來りてお藤へ渡せしを披き見れど元來吝嗇は人に勝たるお藤なれどいろは文字の外は讀得ぬに是非無く帳場をも人に任せて置程なれば男文字の手紙は一字も讀ず例九助に讀せて其答をば口ずから云ひ遣れば九助は好事として是も又無心を云ひ出し酒の呑代と爲事なりしがお藤は何卒して九助の目を借ずに手紙を讀度ものと考へる処此頃二階へ來りし羽淵の息子は年若ながら怜悧にて物數を云はぬ容子ゆゑ彼れに讀せて返事をも書て貰えんと二階へ上り彌三郎に讀しめたるに果して此暮の仕拂ひに差閊へる由にて金廿兩の無心なりお藤は苦り切し顏つきにて今年の暮は世間の景氣が惡さに來る筈の物さへ取らねば廿兩の事は置て十兩も無心は聞れぬ返事にも及ばず九助に口上で斷りを云ふて遣りましやう是れ大き

に御面倒さま御病人さまをお大事にと云ひ捨て階子をミシ〳〵下行さり斯て其年も已に暮て正月の中旬と成しに寒氣の緩みし爲にや秀廣は次第に快方に至り杖にすがりてはソロ〳〵歩行も成までに肥立しかバイザ小梅を尋ねんと彌三郎の肩にすがり業平橋邊まで出掛されど息切れの爲に足も進まず強ては惡らんと彌三郎が頻に諫むれば此日は途中より鶴屋へ歸り次の日には彌三郎一人宿を出て小梅の邊より向島を出會人毎に妙叔尼の事を聞に三四年前より秋葉の門前へ菴を結びし尼は有れど何と云ふ人やら名は知らず年は七十ばかりなるべし常には茶をも爲容子なりとの話しに彌三郎は心嬉しく先秋葉の宮居へ詣で門前を尋ぬるに東の出はづれに田を前にしたる家有りて入口には小やかなる枝折門を構へ芳雨菴の三字を彫さる板額を掲げ左右は寒竹の生垣にて庭に二抱へも有るべき松の二丈ばかり上を寸切にしたるへ破たる摺鉢を覆ひしが垣の外より見越さるゝのみにて苔むしたる艸家根の軒深く内の容は知るに由無けれど正敷尋ぬる妙叔尼の菴なるべし

●第四回

彌三郎は此菴こそ尋ぬる妙叔尼の住家に相違無しと先身の塵を手拭ひにて拂ひ柴の戸をソト押ば音も無く明たるを入て又たソト建寄せ古き板に瓦など取交て飛石に替たる上を傳ひて上り口に小腰をかゞめ案内を乞へバ誰とて内より障子を明るは妙叔尼なるべし不思議さうに彌三郎を左見右見て何方よりのお出ぞと問ふゆゑ此方は竹椽に手を突て　彌「甚だ打付な儀なれど御菴主樣は其以前松平周防守樣にお勤めの嵯峨野樣でござりますかと云ふに愈々不審氣なる面色にて　尼「ハイ左樣でございますが那方は何方樣か年寄ましてトントお面を覺えません　彌「イエ初めてお目に掛りましたのでございますがチト伺ひ度儀もござり次第に寄ては御無理も願はねバ成ん事について出ましたが是では何分お話しも　尼「御尤もでございます御覧の通り住あらして穢らしうございますがサアお通り下さいましとの詞に彌三郎は椽へ上り我踏物を片寄て一と間へ通り四方を見れバ竹を編て天井と爲壁を穿て窓を作り反古をもて腰張としたり左り勝手に丸爐をおろし自在の古びたるに釜を釣下物さびたれど甚清げなり一方の壁を床の如く仕て佛名の一軸を掛竹の筒へ梅を挿て備へあり　尼「サア如何ぞお進み下さい

まし　彌「流石は名高い妙關様のお傍にお勤程有つて御風流なお住居で感心致しました　尼「イヤモウお恥かしい事でございます其お尋ねと申は如何やうな御用でございますか　彌「ヘイ私くしは尾州名古屋の者で羽淵秀廣と申醫者の悴彌三郎と申不調法者で以来お見知り下さいまし扨御菴へ上りました譯と申は其以前斯々の事で周防様へ納りました香合の前の持主が其品を頼りに望みまして私し親子が江戸へ出るを幸ひにお拂ひ戻しを願つて呉ろと申されてお屋敷を人をもつて伺はせますると御存生中に那方様が御拝領になり其以来小梅邊へ御隱居との事で早速にも出ます筈なれど昨年より父の病氣で一時は手放しかねる程の容躰ゆゑ心には存じながら一日〳〵と延引致し漸く今日上りましたが其お品は今以て御所持でございますかと聞れて尼は涙を浮め　尼「思ひも寄らぬお尋ねで卒に昔を思ひ出し計らず涙を濺しましたお尋ねの香合について残念な事がございますとさめ〴〵と泣を見て扨は盗難にでも掛りしか又たは火災に亡しかと心ならねば其譯はと膝を進めて問かくれば尼は稍涙を拂つて　尼「お恥かしいお話しながら如何ぞお聞下さりませ私しの家は本所にて人に知られたる材木屋で

ございましたがフト致した手違ひから家藏を人手に渡し家名は末の弟が相續致せど以前仲間の材木屋へ手代奉公を致し勤上て細くも以前の暖簾を掛させ度樂しんで居りました所弟が惡い遊びに遣り主人のお金を遣ひ込んだ事が知れたれど今の内に其お金を調達して主人へ納るならば此度は知らぬ分で置て遣らうと慈悲深ひ詞なれど以前と違つて今の身は其日を送るが手一ぱいお金は五十兩なれど尼の身にて出来やう筈も無しト云つて今迄の辛抱を水の泡と爲も身から出た錆とは云ふもの丶弟が主人から暇に成ば尼の死水の取手も無く成道理夫ゆゑ身にも命にも替られぬ先殿様から拝領の立瓜の香合を質入して其お金をば贖ふたれど返金の時が来たり翌の朝までに五拾兩を返金せねば或お大名へ賣て仕舞ふと昨日も今日も矢の催促今の身に成ては不用の品ながら何卒一度は受戻して其上拂ふとも今爰では成事ならばと心配致して居りまするを語るを聞て彌三郎が　彌「シテ其質の置先と申は　尼「ハイ淺艸諏訪町の道具屋尾張屋富藏と申方で
彌「さやうなれば其尾張屋方へ私しが參りまして日延を致したら届かぬ事はございますまい　尼「イヽエ私しも精々頼みました上の事で實に残念に存じて居り

ます所ゆゑ以前のお所持主と有れば同じ手放しますならば那方へお讓り申度も
のでございます五十兩へ利分を添て明日までに御持參に成ますならお望に任せ
ましやうと云ふに彌三郎は素より望む所なり殊には二百兩と云ふ品が五十兩で
手に入事ゆゑ飛立程に歡ばしけれど秀廣の病氣に路用さへ殘り尠に成し折なれ
ば名古屋へ急飛脚を立るの外には五十兩の出所無く今目の前に其品は有れども
金の間に合ねば否とも應とも答に詰り暫く首を傾けて思案せしが漸くに心を定
め
彌「宜しうございます國元へ申て遣すせば右から左りへ百や五十の金は參る
都合に成ては居れど如何急いでも七八日の間合が無くては間に合かねますが少
くは路用の貯へもございますから如何なりと工風致して明日は相違無く持參致
し香合をお讓り受申ましやうと聞て菴主は歡ばし氣に　尼「左樣ならば是から私
しが先方へ參りまして明日私し方まで持參致して御待申樣に話し置ましやうイ
ヤモウ餘り先方の申方が憎らしく聞えますゆゑ如何ぞ金子で受戻し直に手放し
ますとも先方へは遣り度無いと存じて居りましたが意地にも力にも屆かぬがお
金で是非無い事と諦めて居りました所思ひも寄らぬ那方の爲に受戻す事も出來

殊には以前のお持主へ戻る譯なれば先殿樣へも申譯が立まして此樣なお嬉しい
事はございませんと喜ばれるに付て彌三郎は金の調達が心に掛れど程宜く詞を
合せて翌を約し暇乞もそこ〳〵に立出しが鶴屋へ歸つて父の秀廣に相談した所
が目的の無いは知れた事左も無くてさへ路用の手薄を心配して居る所へ又た差
迫つた金の事を聞せたなら漸く肥立た那の身躰が再發でもさせた日には取返し
のならぬ事に成らうも知れぬコリヤ寧妙叔尼が疾に賣て今は無いと云つて諦め
させたが增であらうかイヤ〳〵夫では遙々と江戸へ出ての心配が水の泡夫のみ
ならず死とまでに一端思ひ詰た一徹氣の親父ゆゑ再度如何云ふ差詰た氣に成ら
うも知れぬア、如何ぞ仕やうは無い事か「エーイ氣を付て步きやアがれ此方ア
醉て居るンダ手前にやア此御機嫌が分らねへか　彌「コレは飛だ失禮な事を……
オヽお前は鶴屋へ出這りを爲九助さんで有つた眞平御免なさいまし　九「オヤ已
樣を知つて居るナア誰だ目がチラ〳〵仕て少しも分らねへ誰だつけナア　彌「鶴
屋の二階に逗留して居る羽淵の悴でございます　九「ウヽ違へねへ思ひ出した息
子の色男だつた已が無心の手紙を以て往さ時に慾張の鶴屋の後家めがお前に讀

で貰つたツケノウ己ア忘きて仕舞つたアハヽヽオイ息子鶴屋の婆は慾張る代りな丸しきは持て居るヨ斯見へても己なんざア瓦竈の火焚てそ仕て居るが錢金は年中無へのだ息子の前だが那の婆の甥めが無心の手紙を以て来ては己に取次とさせるから那方から二朱此方から一分貰やア直に酒と壺皿宵越の錢は持た事の無へ九助様だ天下の通用を何だと思つて居やアがるか溜込んで置なア氣が知れねへじやアねへかト酔の餘りに口も軽く問はず語りを彌三郎が聞てフツト心付

彌「モシ〳〵其お話しについて少しお頼みがございますが聞ては下さいますまいか　九「何だ己に頼みなら瓦の竈の中へ一と晩寐て見度のな夫なら遣て見ねへ妙だヨ面は少し黒く成がイヤ金屏風を建廻して寐るよりも暖うだぜ　彌「イヽエそんな事ではございません　九「ムヽ一違つたか夫より外に己の頼まれる事は無へが　彌「外でもございませんが金をお借申度ので　九「串戯を云つチヤアいけねへ人をばかにそらア　彌「イヽエお前さんにお借申のではございません鶴屋の御主人からお借申度ので　九「ムヽそんなら分つたが何程借るのだ　彌「五十両欲うございます　九「駄目だ如何して那の婆が貸ものか僅五両か七両借るにもイヤ証

人の引當のと面倒臭い事ばかり云てお負に利足は天引と来るなら証文通りの金は遣入ねへ其癖三月より早く返金されチヤア迷惑だなんぞと勝手な事をぬかすイヤ駄目だ止た方が宜　彌「イエ〳〵夫は何程利の高い金でも構いません國なら金が届き次第三ケ月分の利足は損と致して元金は當月中には急度お返し申ますが如何ぞ一ツお骨を折なすつて下さいませんか那方へお禮も承知致して居ますからト頼に頼むと九助は暫く考へて何か點頭　九「其金テエナア國から急度来るね　彌「今晩にも手紙を出しますと四五日内には相違無く参ります　九「ムヽ何にしても那の婆は駄目だ遂此頃二階へ来て泊つて居る見ず知らずのお前方に五十両は扨置て五両も貸争じヤア無へからそんな出来ねへ相談は止として己にタンマリ禮を為なら一番智恵を貸て金の工面を教へて遣らすか　彌「イヤモウ如何云ふお金でも構いません出来さゑ致せば那方へお禮は充分に上ます　九「ヨシ夫さへ承知なら先其智恵の程を云つて聞せるから吃驚仕なさあんよ斯だ去年の暮に鶴屋の婆の甥の野郎が無心を云つてよこした手紙をコヽ此通り己が托し込んで置た此奴が用には足るんだ暮に那の婆が云ふには春に成ば少し高が殖ても貸て

遣ると云つたのが此方の付目だお前ハ知らん顔で鶴屋へ歸つて居なせへ己ハ此手紙へ封をして新規の手紙の顔で持て往ハ婆ハ無筆だから暮ふ見た手紙だか何だか知らねへでソラお前ふ讀で貰ひヿ持て往に違ねへ所て五十兩の無心が書て有る積りで出たらめに讀のがお前の役だかゝ少し哀ツぽく如何でも胡麻かしさへすれバソラ五十兩ハ己ヿ渡すだらう所で又た爰の所で待て居るから跡から出て来れバ金ハ貴殿へお手渡しと云ふナア如何だ　彌「成程旨い工風でハございますが萬一尻が割た時ハ盗人でございますからチト夫ハ　九「割ねへ事受合だ何故と云つて見ねエ甥の野郎が出て来た所が直にハ往ねへ己の所へ来るから四五日待と云つて置うちヿ國から来るだらう其金を遣れバ事濟だ甥が来ザア利足を付て實ハ斯々だと譯を云つて返せバ慾張婆ざから腹を立所か大喜びだ後暗のハ四五日の間で直ヿ後あかるく成のだから構ヤアしねへ夫とも否なら止が宜無理ヿ勸る譯じやアねへそんなら先へ往ぜ　彌「ア、モシ〳〵少しお待なすつて下さいまし　九「何ぞ用か　彌「背ヿ腹ハ替られません今のお話しの通り如何ぞお頼み申ます　九「夫見たか仕方が有るめへ夫じやア早く歸つて待て居なせへ　彌「宜しうございます併し金子を受取ます場所ハ　九「夫だからヨアレ向から一イ二ウ三ツ目の岳竈の後に待て居るから早く来てくんなせへ　彌「左様なら何分願ひますト右左りへ立別れて九助ハ小唄交りに漂然と小梅の方へ行過たり　彌「ヤレ〳〵是でマア少し落付たが定めし親父さまが待てござらう早く歸つて此容子をイヤイヤ云ふまい肥立たとハ云ふもの、未中々顔色も前の様にハ成ぬ程の身躰へ苦勞を掛てハ悪からう香合が手に入まではハ宜やうに云つて置と仕やう九助どのが先に成らぬ内ドレ急いで歸りましやう

第五回

彌三郎ハ鶴屋の二階に今か〳〵と待所へ主人のお藤が階子の口より半分顔を出し　藤「モシ若旦那其處へ參つても宜しうございますかと覗くを此方ハ夫と悟り　彌「ハイ親父ハ寐て居ますからお構い無さらずとお出なさいまし　藤「オヤ夫ハ旨い所へ来ました卜云ひつゝ靜に上り来り　藤「早速でございますが又甥の奴から手紙をよこしましたお金の事だらうとハ思ひますが如何か御覧なすつてと出す手紙を受取手も心に恥くお震ふを何氣無き体ニて　彌「ハヽア又參りましたか

藤「九助が御酒にでも酔たと見へて手紙の古ぼけて居る事は如何して斯に織らしく仕ましたらう　彌「酒呑に持せて置ては何でも耐りませんト程好く調子を合せて飯粒で付たる封じ目を切口の内にて讀下して　彌「ハヽア相替らず無心でございます　藤「何程呉ろと云ふのでございます　彌「五十兩　藤「エヽ五十兩何に爲る爲だろうと云ふを聞て金高が不足されてはと氣が氣で無く　彌「酒の上にて喧嘩を致し先方へ傷を負せ既に表沙汰にも成べき所扱ひ人の骨折にて内濟には成候得共本人へ療治代扱ひ人への禮和睦の入用其外の雜費にてゞ六七十兩掛り候何れ事濟次第上り萬々御詫し致すべく候　藤「夫は皆虚ッ事だ人を一杯遣るのだと云はれて此方は胸へギックリ　彌「エヽ　藤「ほんとうに虚が上手でございますから浮りすると欺されます　彌「其事でございますか夫では安心　藤「何の安心が出来ませず斯云つて来たからは何の彼のと取らずには居ませんアヽ憎い奴だが去年の暮にも空を踏せたから仕方が無い　彌「貸て遣のでございますか　藤「當分は跡を固く斷つて五十兩遣りませうヨ　彌「エヽ有難い　藤「お前さんにでも上ヤアしまいしハアヽヽヽヽ　彌「アハヽヽヽヽ　藤「是は大きに御喧しうございましたヤレ

〵私しは飛た色男を持て年中偺せ〳〵には困り切ますトブツ〳〵云ひながら階子を下行を彌三郎は竊立て下を覗き愈々金を九助へ渡したのを見澄して胸を撫おろし手を合せて暫し伏拝み居しが心付て帯引上階子を下んとして又考へ直して出ては怪敷まれんと座つてゐたり立て見たり縁側へ出て空を見たり彼是する間に日暮に成りしゆゑ好き頃と二階を下てお藤には一寸と湯に往と斷り表へ駈出して一散に瓦竃の有る河岸へ至り向ふの端から一イ二ウ三ツ目の爰に居る約束だが夫とも勘定が違つたかと往つ戻りつ尋ぬれども影も見へぬに呆き果て扨は九助に欺されたか夫とも割下水邊りの居酒屋にモシヤ居るかと心も空に諸方を駈歩いて捜せども知れねば今は弱り切り暗き道を腕組して渡るとも無く業平橋を越〆切れ方へ往折しも九助は小梅の居酒屋にてテツチリ呑んで汚手拭と横容に冠り心持好氣に川の端をぶら〳〵と来る向ふへ彌三郎が思案に暮て夫とも知らず突當つて跡へ二足三足闇を透して躊躇ば九助は尻餅を搗た儘起もやらず

九「アヽ痛へ酷い事を仕ヤアがる誰だか知らねへが此方は生醉だ手を取て起して呉起すのが面倒なら脊中を叩いて寐ねこ唄をうたつて呉れば此儘寐て仕舞ふ

から何方でも世話の無方に仕て暮イヤ〳〵寐られねへ〳〵寐て耐るものか懐中に金を持て居たのを忘た何だと誰だお前ハオヽ鶴屋に居る息か今時分何處へ往なさる　彌「イヤモウ捜しましたぜ　九「捜した、何を、落物なら己も捜して遣らう　彌「捜したのハお前さんを捜したので瓦竈の一イ二ウ三ツ目と云ふ約束のあ往たり来たり大きに心配しましたが爰でお目に掛れバ大安心お前さんの御工風通り上都合に參りました何卒お渡しなすつて下さいまし　九「オイ〳〵何だあ藪から棒でチツトモ分らねへが渡せさア何の事だ　彌「ハヽヽ九助さん私しハ一生懸命で居ますのに串戯ハ跡にして金を渡して安心させて下さいまし　九「何の金ヲ　彌「先刻の五十兩を　九「十二五十兩氣でも違つたか瓦燒の九助が五十兩ハ扨置て五百の錢も無へ方が多いのにハヽア落物を仕たと云つたナア金だナ其金を己になすり付るナア酷からう何だ胸倉を取りやアがつて己が今金を持て居ると云つたと篦棒め金ハ人間の持ねへ物ぢやア無し持て居りやア如何するマア胸倉を放せ　彌「コレ九助さんお前夫ぢやア人を玉にして鶴屋の金を取なすつたのだナ　九「金と取たとハ何だ　彌「取たのだ〳〵取たに違ひないお前ハ盗人だ

九「何だ盗人だとコレ途方も無事を云やアがるナ瓦竈の火焚こそ仕て居るがナ人の物を塵ツ葉一本取た事ハ無へぞ平木丁面の九助さまを盗人だとぬかしたナ此明りハ出る所へ出て立なけりやアならねへサア己と一所に来い　彌「オヽ往と云ハずとも往ハ　九「シテ手前ハ何を証據に己が金を盗んだと云ふ氣だ　彌「知れた事先刻鶴屋の金が借て欲いと云つた時見ず知らずの者に五十兩ハ置て五兩も貸すまい夫よりハ甥の手紙を虚讀さへすれば五十兩ハ出来ると此方が口から云つたでハ無いか後暗い事ながら翌の朝に迫つた五十兩ゆゑ國から金が来次第に返す事に此方と話し合た上教られた通り無筆を幸ひ古い無心の手紙を今の事のやうに私が讀だばつかりに此方の手へ五十兩受取たで無いか　九「喧しいヤイ　彌「夫程の金を今と成て　九「喧しいヤイ　彌「知らないの何のとハ　九「喧しいヤイ　彌「マザ〳〵宜云ハれた物だ　九「エヽ黙止やアがレ今聞ヤア手紙の虚讀をして金を取たとイヤ手前ハ面に似ねへ怖しい奴だナア併し宜喋つたサア出る所で其通り云つて見ろ手前の手ハ直に後へ廻るぞお負に笠の臺が飛ぞ夫でも己を盗人だと云ふか夫見ヤアがれ其處に何時までも考へて居るが宜己ハ何處ぞで最一杯

呑にヤアならねへト往んと爲向ふへ廻り 彌「九助さん今のハ私が云ひ過ました如何ぞ勘辨して下さい 九「アハヽヽヽ勘辨も糸瓜も入らねへ夫で宜ならお別れと仕やう 彌「イヽヤ別る事ハ出来ません 九「シテ如何爲のだ 彌「斯して下さい前の事ハ何も彼も無い事にして今改ためて日數五日の間其五十兩を私に借て下さい五日經たなら立派な利足を添て返しましやす何卒お頼み申ますと大地へ手を突て頼むを見て九助ハ鬚を撫ながら 九「苦し紛れに種々な熱を吹ヤアがるコレ考へて見ろ今手前の口から云つたじやアねへか見ず知らずの者に金の貸人ハ無へと夫見たか今日居て翌ハ何處へ帆を掛るか知れも仕ねへ田舎者の宿無に百の錢も貸されるものかヱヽ放しやアがれ放さねへかと振切らんと爲ども彌三郎ハ一生懸命最是までと九助を捕へて押轉さんト揉合しな九助ハ晝からの呑つゞけにて足の踏度が定まらねバ那方此方へ蹌めきながら振放さんと拂ひし機轉に樋の口の横木に急所を打せウントばかりに息絶たり 彌「九助さん浮雲い夫見なさい怪我でも仕ハせぬかオイ九助さんコレ九助さんと震動かせども答の無さに萬一やと口に手を當て息の絶たるに吃驚仰天耳へ口を寄て名を呼も四方へ洩

んと聲を忍び呼ども更に通じねバ呆れ果て立たる折しも柳島の堤の方より来る提燈に南無三寳見認られてハ一大事と狼狽て九助の懐中なる五十兩を引出だし近寄提燈に顔見られじと暗き木陰へ身を寄て遣り過しゝ駈出せバ来かゝりし人ハ足音にて初めて知り上て見送る提燈を的に彌三郎が投さる礫に再度元の闇と成りぬ

記者云是より彌三郎が香合を買取りて名古屋へ歸り癡情の爲に惡事を働き仇討の件に至る長物語りなれど故有つて本回を大尾と仕て筆を置事と成れり見る人結局の全からぬを怪しみ給ふな

明治廿三年九月廿二日印刷出版　版権所有

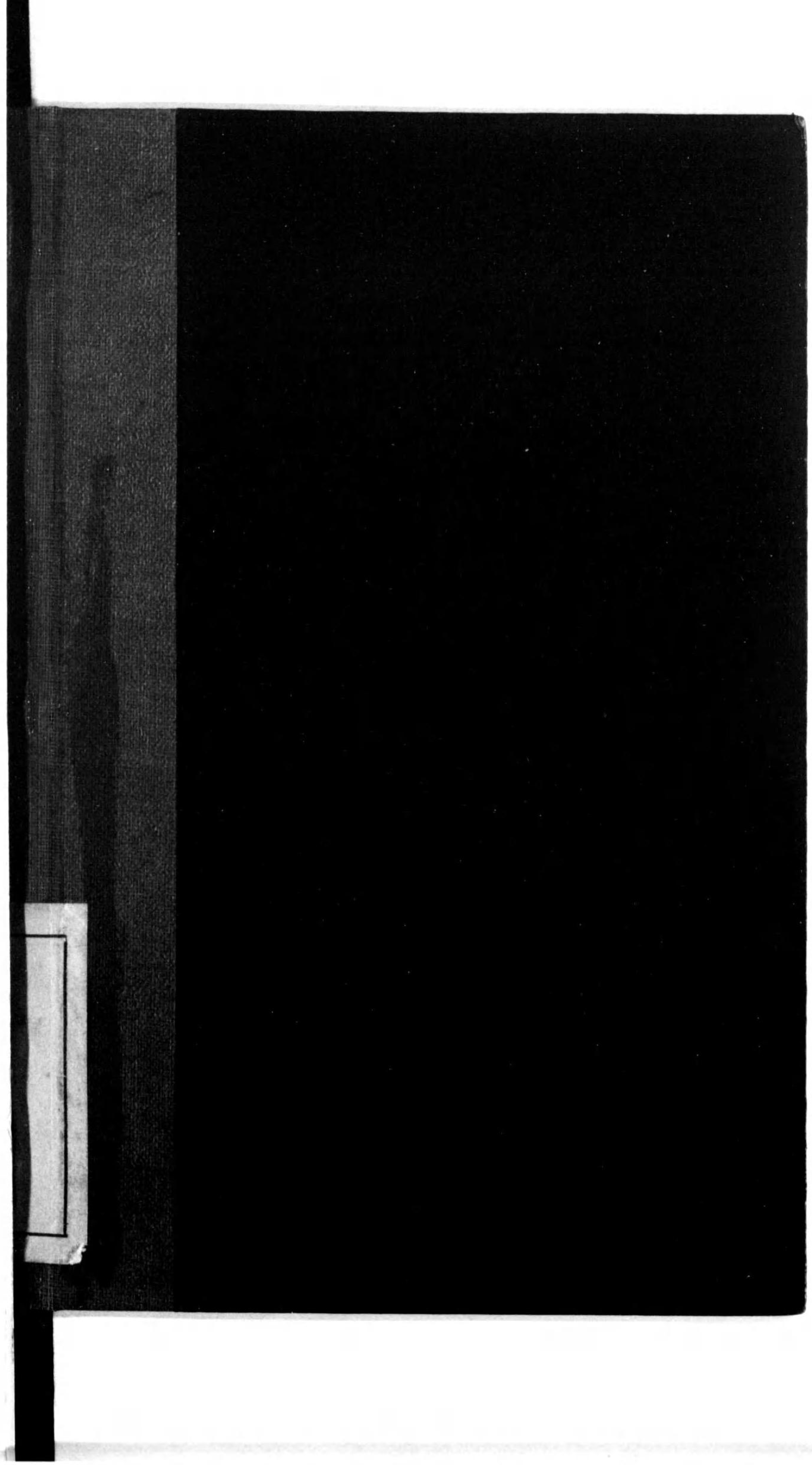
日本橋区通四丁目廿番地

発行者
印刷者　和田篤太郎

版権登録

~~印刷者~~

エ-3394
え 平

F10.
S031

終